

2016年度 外国人の子ども・青少年 エンパワメント事業報告書



2016年度
外国人の子ども・青少年
エンパワメント事業報告書

目 次

外国人の子ども・青少年エンパワメント事業総括

プロジェクト代表 金 宣 吉 1

神奈川地域における外国人の子ども・青少年エンパワメント事業報告	1 3
ジュニアコーディネーターとしての取り組みについて	チュープ サラーン 1 5
インターンの活動を通して感じる就学前の子どもたち	長畠 ハルミ 2 3
わたしたちにとって必要なこと	NGYEN NHAT THUY 2 7
Mの支援の始まりとこれから	チャン ソワンナリット 3 1
インターン活動でみた受験生	清水 真飛 3 5
日本語講師報告：日本語教室の始まりと展開	劉 麗 凤 4 1
母語講師報告：母語を生かした活動	宮脇 英理 4 5
神戸地域における外国人の子ども・青少年エンパワメント事業報告	4 9
ジュニアコーディネーターの活動を通して	高橋 愛満 5 1
カメラを通して見た神奈川と兵庫の学習支援教室の姿	松原 ルマ 6 1
K F Cでの学習支援活動においての学びと成長	服部 奈都子 6 5
インターンを経験して	鈴木 裕子 6 7
1年間活動に関わって気づいたこと－「平等」な教育機会の保障について－	大東 直樹 6 9
高校生インターンになって	陳 宗 堯 7 1
外国人の子ども・青少年エンパワメント事業を終えて	志岐 良子 7 3
参考資料	7 6

2016年度外国人の子ども・青少年エンパワメント事業総括

プロジェクト代表
金宣吉

1. はじめに

本事業の実施法人である特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター（KFC）は、1995年の阪神・淡路大震災時より、在日外国人の多住地域（神戸市長田区）において、幼児から高齢者までの外国人支援事業を行ってきた。その中で外国人の子ども（以下においては日本国籍の子どもも含める場合、原則として「外国にルーツを持つ子ども」と表す）が、言葉の壁、家庭の教育資源の不足、貧困などから低学力に落としこめられ、高校進学においても「日本人」の子どもと比較して著しく低い進学率にとどまり、現在の日本社会で求められる学歴の未達成、資格の不足などにより安定した就労が難しいなど、厳しい生活を送らざるをえない状況が分かっている。

その状況を改善したいと考えKFCでは、外国にルーツを持つ子どもの未来のために高校進学と就学の継続、できうるならば大学等高等教育機関への進学も見据えた幼少期からの学習支援、居場所作り、プレスクール、公立図書館や学校での読書支援事業などを実施してきた。その実践を通して、できるだけ幼児期より当事者（外国にルーツを持つ者）と日本人が連携して外国にルーツを持つ子どもを支援することで状況を改善できる事が分かってきている。

神戸以外の在日外国人多住地域においても、先行研究や報道などから外国にルーツを持つ子どもをめぐる同様の状況が推察される。各地で様々な支援団体が、外国にルーツを持つ子どもを支える活動を続けているが、多くの支援団体は、活動基盤が弱く継続するための体制整備が喫緊の課題となっている。

外国にルーツを持つ子どもの厳しい状況を改善する活動が、長年外国人支援を続けてきたKFCの支援事業と他地域の外国にルーツを持つ子どもの支援活動が連携することで拡大・普及しうると考え、2016年度の独立行政法人福祉医療機構の社会福祉振興助成金を受け、「外国人の子ども・青少年エンパワメント」を実施した。

様々な困難を抱える外国にルーツを持つ子ども・青少年が自立できるよう、当事者が地域とともに生きる人たちと協働してエンパワメントする仕組みができるこことを本事業の最も大きな目的とした。

具体的な事業内容としては、1年間という限られた助成期間を勘案し地域と目的にフォーカスして外国にルーツを持つ子どもの厳しい現状を改善するには、外国人多住地域における外国人児童・生徒・青少年のエンパワメント事業の実施とともに事業を推進する人材、特に子どもの感性に近い感覚を持つ若い人材の育成が最も大きな課題と考え、事業を推進する側の一員として若者をジュニアコーディネーター、インターンとして採用、兵庫県神戸市の古くからの外国人多住地域である長田地域

と神奈川県横浜市と大和市にまたがる新しい外国人多住地域であるいちはう団地周辺地域において、下記4つの柱だけをもとに事業を実施した。

- ①外国人子ども支援事業コーディネーターの育成
- ②外国人子ども支援人材の育成
- ③外国人子ども支援の充実
- ④外国人子ども見守りネットワークの拡大

①外国人子ども支援事業コーディネーターの育成では、外国にルーツを持つ子どもを支える社会活動に关心がある青年をジュニアコーディネーターとして採用し、研修、事業コーディネートアシスタントを通して外国人子ども支援知識の習得、運営スキルや事業コーディネート力を育成した。

神奈川県においては、5歳で日本に来たカンボジア難民のチュープ サラーン（社会人：カンボジア難民）、兵庫県においては、アメリカ留学経験を持ち、自らのマイノリティ体験から日本の在日外国人の子ども支援ボランティアを始めた高橋愛満（社会人：日本）の2名の若者をジュニアコーディネーターとして採用し、本事業の実施をサポートする業務に従事してもらった。

ジュニアコーディネーターが、外国にルーツを持つ子どもを支える事業を進めるために必要な外国人の社会状況、事業を調整する事務スキル、関係機関と連携するための連携スキルなどをKFCスタッフや協力研究者らのもとで学ぶことは、漠然としたイメージとしてしか把握できていなかつた子どもを支えるNGOの具体的業務を若い人材が理解、体験する貴重な機会となつた。

②外国人子ども支援人材の育成では、外国人の子どもの状況を理解し支援活動に参加・協働する青少年インターンの育成をはかることと、子どもの学習支援やプレスクールなど当事者や当事者コミュニティが担いにくい子どもの支援をともに担う日本人青年の参加を促すことを目標とした。

インターンとして神奈川においては、チャン ソワンナリット（社会人：カンボジア難民）、^{グエン} NGYEN NHAT THUY^{ニヤントクイ}（大学生：ベトナム難民）、清水眞飛（大学生：日本）、伊藤瑞姫（大学生：中国残留邦人※インターン途中で留学）、長畑ハルミ（高校生：日系ペルー）の5名を採用、ほかに母語教室、日本語教室の講師として宮脇英理（大学院生：日中系ベトナム）、劉麗鳳（大学院生：中国残留邦人）の2名を採用し、神奈川での事業に従事してもらった。

兵庫県においては、インターンとして松原ルマ（社会人：日系ブラジル）、大東直樹（大学院生：日本）、服部奈都子（大学生：日本）、鈴木裕子（大学生：日本）、陳宗堯（高校生：中国※事情により途中終了）を採用、松原ルマは、映像作成スキルを活かし本事業の映像記録を担当、他の4名は、兵庫県における子ども支援事業に従事した。

人材の育成という視点から、上記の若者が、単に外国人支援のNGO活動に参加するのではなく、なぜその活動が必要なのか、どのように行うことが有効なのかを考えるために研修、文献（いちはう団地関連文献）講読発表の開催などを子どもへの学習支援、プレスクールなどの直接的な子ども支援事業への参加とともに実施した。特に文献講読発表は、ジュニアコーディネーターやインター

ンが発題要約資料を執筆し、講読会の準備も担うことによって、若年層の深い理解が進められた貴重な機会となつた。

③外国人子ども支援の充実は、外国にルーツを持つ子どもがハンディキャップを乗り越えるために幼児期から青年期までの教育環境を充実させる事業を実施した。

子どもたちの豊かな成長と青少年の自立を図るために、子どもへの学習支援及び学校での通訳、授業の付き添い、読書支援活動、子ども食堂等を開催、ジュニアコーディネーター、インターンらを中心に多くの新規ボランティアも呼びこみ事業を広げ実施することができた。

④外国人子ども見守りネットワークの拡大では、外国にルーツを持つ子どもを支える事業を担うために不可欠な教育機関、国際交流機関、研究者、外国人支援NGO、当事者コミュニティのネットワークの構築をめざし、特に関係機関との連携が取りにくく都市郊外にあるいちらう団地の若者の実情を考え、KFC関係者や大学研究者らの協力を得て関係機関訪問、関係機関業務の理解講習会を実施した。

短い期間に4つの柱を設けて実施した本事業は、当初予定した成果を十分出せなかつた部分もあるが、多様な事業により新しいつながりが生まれ、想定を超えた成果（韓国との共同事業開始など）を生み出した。

2. 事業考察

本事業のテーマである「外国人の子ども・青少年エンパワメント」を実現するために必要と考え実施したことは、「共有」と「つながり」というエンパワメントのための基盤づくりであったと考える。

情報社会における「共有」は、情報や知識を共有することを中心に理解されるが、社会的課題を抱えさせられている集団（在日外国人）のエンパワメントを目的とする時、考えていくべき「共有」は、単なる情報や知識の共有を超えて、社会の主流と非主流によって社会階層化、隔絶させられる現実に対する是正への思いの共有、時代や地域は違っても外国にルーツを持つ子どもの支援、エンパワメントを行ってきた人たちの熱が感じられる経験の共有も含められるべきであると考える。

また共有を超え、外国人の子ども・青少年のエンパワメントを支える人の輪、「つながり」づくりは、精神的なつながりだけでなく、実績や信頼を基盤におく日本社会において、助成金や補助金といった実際の支援に必要なリソース確保につながる力にもなり、外国にルーツを持つ青年らにとって、大変重要なつながりづくりとなつた。

「共有」と「つながり」の実践が生み出す成果は、本事業終了後、一定の時間経過を経て検証されることも多いが、現時点での可能性も含めた考察を記したい。

i. 状況認識と課題の共有

本事業を実施してまず気づいたことは、外国人の状況、特に自分たちが置かれている状況に対して、在日外国人側の若者らが果たしたいと考えている役割と日本人側による状況理解、日本人側が在日外国人側に求めている役割認識に生じているズレであった。

本事業の主要な対象地域となつたいちょう団地は、外国人居住率の高さもあってメディア、アカデミックな世界で注目されることも多い。そのため、外部の人間（研究者やメディア関係者）が、いちょう団地と外国人の関連を取り上げる動機が生みだされやすいようであり、いくつかの先行文献発表がなされている。

しかしこれらの文献を本事業のジュニアコーディネーターとして、また神奈川事業の講師、インターンとして参加した連携団体である「すたんどばいみー」の外国人青年らは把握していない状況であった。

神奈川県において、「当事者」団体として一定の認知を得ているすたんどばいみーメンバーらは、自分たちの生活拠点であり、活動フィールドでもあるいちょう団地を扱った外部からの研究の内容、記述を日常的に支援されている研究者の文献以外ほぼ把握していなかった。

いちょう団地に限られたことではないが、在日外国人の多住地域を扱った研究の内容・記述が、当該地域に暮らす研究対象当事者である在日外国人の実態を十分に把握せず、偏った情報や伝聞を根拠にし、稚拙な論旨展開が行われることは数多く見られる。にもかかわらずその内容を扱われた側の当該地域の在日外国人は把握しておらず、誤った認識のもとで日本人と在日外国人の関係のあり方が、当事者と乖離、隔絶された状況で語られ、理解されるという現象が生まれている。

本事業においては、そのズレに着目し、いちょう団地を扱った先行文献をとりあげ、在日外国人へのまなざしと理解をめぐるズレを若年参加者が深く理解できるよう文献の講読発表という形式で、ジュニアコーディネーター、講師、インターンらが担当し進めた。

とりあげた文献は、「多文化共生を促進する“繋がり”の位相と意義—いちょう団地 多文化まちづくり工房による活動を通じて—」（金高弘明、2015、早稲田大学）、『多文化共生の学校づくり—横浜市立いちょう小学校の挑戦—』（山脇啓造+横浜市立いちょう小学校編、2005、明石書店）、『いちょう団地発！外国人の子供たちの挑戦』（清水睦美・「すたんどばいみー」、2009、岩波書店）、『『共に生みだす』ものとしての共生—神奈川県営いちょう団地の多文化共生とNGOによる連帯の形成—』（小林誠、2016、武蔵大学）、「社会階層と多様性の間にあるもの～神奈川県営いちょう団地における意識と生活・教育の実態から考える～」（馬場有希、2009、聖心女子大学）となつた。

この文献講読発表については、各担当者の発表詳細は省略するが、担当した外国人、日本人の若者にとって、またその場を共有した参加者全員にとっても非常に有意義なものとなつた。

自らが他者の記した記述をトレースするなかで、共感することまたは違和感を持つ記述を整理し、なぜ共感するのかもしくは違和感を持つのかを自らの文章で表現し伝えること自体が若者のエンパワメント、力づけの一つとなつたと考える。

とりあげた文献のなかでもネット検索で入手しやすい金高弘明が、大学卒業論文として書いた「多文化共生を促進する“繋がり”の位相と意義—いちょう団地 多文化まちづくり工房による活動を通

じて一」は、先に書いた「ズレ」を考えていくうえで典型的な誤謬を内包していた。

いちょう団地内の外国人支援NPO「多文化まちづくり工房」をフィールドに書かれたこの論文は、前提として、「文化は極めて多義的・流動的であり、一括りにして言い表すことには困難」であり、「同国人の集団内においても、個人ごとの価値観や規範意識は、異なり、(中略)時として変化する」と述べ、「集団内の多様性や異質性が尊重される」多様性を認める「多文化主義」が重要であると述べ、この多文化主義は、自らの本論文で扱う趣旨と合致しているとありながら、後半の記述では下記内容が記されている。

「外国人住民全てがその役割(活動を担う役割)を果たせるようになれば、御の字であると言える。しかしながら、現実はそう甘くない。場の作り手になるためには、待ち受ける数々の障壁を乗り越えなければならないのである。例えば役所へ交渉に行く際には、しばしば微妙な駆け引きが求められる。時には口を噤み、引き下がる必要性もある。そうした、暗黙の了解にもとづいた所作を身に付けることは簡単ではない。相手を立てれば円滑に物事が進む場合であっても、外国人の多くは自身の主張を前面に出て(原文ママ)しまうのである。双方の食い違いは手枷足枷となり、物事の進行を妨げてしまう。また場の作り手は、活動が完遂するまで継続的に責任を取る必要性も有する。多くの関係者を束ね指揮する立場であるため、途中で投げ出すことはできないのである。以上のような困難さがあるため、まずは日本人が場の作り手として突破口を開く必要がある。そうして完成した場に外国人達を呼び込み、主体的な活動を促せば良いのである。団地祭りに際しても早川氏が中心となり、自治会等への対応を取りながら場の創出に努めている。しかし、そうであるといって、外国人を含むその他大勢が脇役に成り下がるわけではない。実際に料理の提供等、活動を担う多くの人々は、ベトナム人を筆頭とする外国人達なのである。こうしたいちょう団地の例のように、まずは日本人が場の提供者となり、その後外国人達を巻き込みながら活動を行うという選択が、実は目的への近道となるのである。」(下線、()加筆は筆者による)と述べている。問題個所と考える部分は相互に連関しているので少し長いが引用した。

要約するとこの論文では、マイノリティの集団内の多様性や異質性はほぼ認められていない。外国人は、自身の主張を全面に出し微妙な駆け引きができず、多くの関係者を束ね指揮するには不向きで途中で投げ出す存在とされている。

外国人のなかの多様性が前提ならば、時には口を噤み、引き下がることも出来、暗黙の了解にもとづいた所作を身に付け、相手を立て円滑に物事が進むように配慮が出来、多くの関係者を束ね指揮することができる外国人もいるであろう。

しかしそういう可能性の検討は皆無であり、外国人は、まずは日本人が場の作り手として突破口を開き、そうして完成した場に呼び込まれ、主体的な活動を促せられる存在である。金高は、役割があれば対等であると主張するが、日本人が束ね指揮する事業に外国人らが料理の提供等の役割を担うことは、やはり脇役に成り下がることであろう。

自らがかかわったフィールドNGOとNGO代表者へのシンパシーからの活動評価、人物評価が生み出した論述と甘く理解しても、前提として書かれた集団と個をリンクさせて見るのではなく、集団のなかにある多様性を前提として他者を理解するという趣旨は破綻しており、支離滅裂な論述と

なっている。

企高論文は、稚拙を超えてはや無残である。この論文が学生の学士論文であることを考えると指導教授の責任も重い。

このように「いちょう団地」の外国人と日本人の関係性をめぐっては、外国人の力を不當に下げたり、支援する日本人を過剰に持ち上げているとみられる記述も見られ、「いちょう団地」をとりまく外国人支援活動への理解、視線に関しては、前提とする概念やどの外国人支援団体の情報をもとに見るかによって大きくバイアスが生まれている。

次にいちょう団地の地理的状況、入居世帯の経済状況、民族構成から外国人学校進学という選択肢がほぼないいちょう団地に暮らす横浜市側の外国にルーツを持つ子どもにとって、ほぼ唯一の初等教育機関であつたいちょう小学校での取り組みを明治学院大学の山脇啓造と小学校関係者がまとめた『多文化共生の学校づくり—横浜市立いちょう小学校の挑戦—』を見ると内容以前に本事業の趣旨から考えるべき課題が見えた。

この本には、いちょう小学校での「多文化共生」への取り組みが、運営体制、通訳指導、日本語教室、イベント、図書室の取り組み、給食、多言語対応、PTA活動など多方面からの実践報告として記述されている。

この書籍が公立小学校での取り組みという前提であるため、この書籍の執筆原稿44本、執筆者総数54名のなかで外国にルーツを持つ者は、3名（学校通訳1名、PTA2名）のみとなっている。

長年の公立学校教員採用（公務員採用）における国籍条項や採用試験のハードルの高さによって、外国人多住地域であっても、公務職（公立学校教員など）に外国人は実質的に就任できていない。その現状においての公立学校における教育環境の整備は、「日本人」が準備する器のなかでの検討にならざるを得ない。

問題を感じるのは、にもかかわらず「多文化共生の学校づくり」というタイトルが使われる感性である。

編者である山脇は、「多文化共生の推進に関する研究会」（2006.3）の一員（座長）として地域における「多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」という定義をした一人だが、上記の本の構造でも「多文化共生」が使えるならば、「対等な関係を築こうとしながら」には、指導やカリキュラムを作る側に国籍や民族などの異なる人々が参加できていない状況が含まれることになる。

「多文化共生」という言葉が氾濫するなかでは、日本人と外国人の関係性を深く考察する感性は薄れているが、「外国人の子どもを多く受け入れている学校での日本人公務員らの取り組み」が、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」に格上げされうるならば、「多文化共生」という言葉は軽く、罪深いといえるだろう。

上記のようにいちょう団地にかかわる状況を「日本人」側が記した文献が見られる一方で、「すた

「んどばいみー」メンバー、他団体にかかわる外国人も含めマイノリティ側からの記述による発信はほぼ見られない。

いちょう団地関係者からの発信を見ても「多文化まちづくり工房」の早川秀樹代表や「すたんどばいみー」支援者である日本女子大学教授清水睦美教授らに限られている。

誰がどのようにいちょう団地の「多文化」、「外国人」をめぐる状況を発信するかは、外国にルーツを持つ子ども・青年の環境づくりにとって重要である。そのことを考えると現状描かれている「ズレ」状況に対して、いちょう団地で活動する外国人側の発信を考える必要性は高い。

そのためには、日本で教育を受け、自分たちが置かれている状況と自分たちの果たすべき、または果たしたいと考える役割を日本語で文章として書ける外国にルーツを持つ若者、1. 5世、2世世代の発信力を育成することが急がれる。

本事業においては、上記の問題認識から一つの目標として在日外国人の若者らによる情報発信、具体的にはすたんどばいみー機関誌の発行を掲げた。

外国人当事者側からの状況認識と課題の発信は、ズレを修正するために不可欠であるが、その発信を行うためには一定の訓練とサポートが欠かせない。紆余曲折はあったが、すたんどばいみーの機関誌第一号を2017年3月に発行した。またこれから団体の発信ツールとなるすたんどばいみーのパンフレットも製作した。

ii. 知識、経験の共有

事業に参加した日本人の若者と1980年代以降に渡りし在住している外国人家庭の子ども（青年たち）は、双方の自己認識、他者認識に必要と考えられる日本社会が進めてきた外国人処遇政策や長年外国にルーツを持つ子どもの支援をしてきた団体についての知識も十分習得できておらず、繋がりができていないことも分かった。

この状況を受けて実施した研修とフィールドワークは、合計9回、単に研修、フィールドワークに若者が参加するのではなく研修講師、フィールドワークコーディネーターへの依頼、会場の手配、案内チラシの作成、当日参加の呼びかけをジュニアコーディネーター、講師、インターンらがKFCスタッフと協力して担当、自らが知識やネットワークを広げる側としてかかわることも学ぶ研修、フィールドワークを開催した。

研修、フィールドワークの内容と講師は、①「ベトナムにルーツをもつ子どもたちの進学と就労調査より」（大阪大学助教 山本晃輔）、②「日本における外国人処遇の変遷」（慶應義塾大学教授 柏崎千佳子）、③「偏見と差別について」（甲南女子大学教授 野崎志帆）、④「かながわ国際交流財団の取り組みの歴史及び他団体への支援について」（公益財団法人かながわ国際交流財団 富本潤子）、⑤「在日ベトナム人の背景と現状」（KFCスタッフ 福山恵（旧姓 Ha Thi Thanh Nga））、⑥「社会から外される経験を声や物語にするとは何か」（すたんどばいみー立ち上げ中心メンバー グエン タン ティン）、⑦「外国にルーツを持つ子どもの人口規模と進学率の年次推移—子どもたちの家庭背景と時代背景に着目して—」（大阪成蹊大学准教授 鍛治致）、⑧フィールドワーク・NPO法人在日外国人教育生活相談センター信愛塾（信愛塾センター長 竹川真理子）、⑨フィールドワーク・コリ

アNGOセンター（コリアNGOセンター理事・事務局長 金光敏）となった。

日本の公教育において在日する外国人の歴史背景や現状を学校にいる外国にルーツを持つ子どもの存在に配慮して学ぶ機会は乏しい。

いちょう団地の外国にルーツを持つ子どもには、2000年から2005年の6年間、大和市側の中学校だけではあったが、自己の存在や状況を知る先駆的取り組みであった「選択国際」授業があった。しかし残念なことに選択国際は、その後、学校再編もありカリキュラムとして位置づけられた公立学校における取り組みはなくなり、体系として在日外国人の若者が自らの置かれている状況をシステムとして知る機会はなくなっている。

神戸市においては、教育システムとして外国にルーツを持つ子どもらが自分たちの状況を知る機会はなく、親世代の難民当事者、中国残留邦人帰国者らの語りや関係者からの学びにも触れられていない状況であった。この状況を考えると、当事者の背景学習をステークホルダー（当事者、行政関係者、教育関係者、ボランティアら）と進めた今回の研修、フィールドワークは大きな意義があった。

研修は、研究者らからの偏見や差別、外国人処遇の変遷や現在外国にルーツを持つ子どもが置かれている状況を学ぶ貴重な機会となり、外国にルーツを持つ子どもを支えるために必要な知識を得るだけでなく、社会的取り組みへのモチベーションを高めることにもつながった。

またフィールドワークで訪問した信愛塾やコリアNGOセンターでは、横浜市の中村地区や大阪市の生野区といった古くからの在日外国人多住地域で子どもを支える組織の中心メンバー（竹川真理子、金光敏）による熱のこもったレクチャーも受け、外国にルーツを持つ子どもを支える人の強さ、志に触れる機会ともなった。次世代を担う若者が、活動を継続することの大切さを学ぶ機会となつた。

神奈川県の多文化共生事業に取り組む機関、NGOへの支援を積極的に実施しているかながわ国際交流財団（K I F）からの学びは、本事業の取り組みの柱でもあり、助成期間終了後の大きな課題でもある「外国人子ども見守りネットワークの拡大」について貴重な情報を得る機会となった。ネットワークの拡大に向けては、研修のほかにも多文化まちづくり工房、公益財団法人かながわ国際交流財団、公益社団法人大和市国際化協会、特定非営利活動法人かながわ難民定住援助協会、神戸大学、慶應義塾大学などを訪問し、情報交換できる関係づくりに向けての機会を作ることもできた。

本事業の初期、率直に感じたこととして、すでに構築されている神奈川の「多文化共生」関連者のネットワークからは、当事者性を強調しているとみなされていた我々は、一種の異物として吐き出される対象になりやすい存在であったということである。

この状況を生みだす要因は、（i）に書いたように神奈川における「国際交流」、「多文化共生」事業、もっと大きな文脈で考えると日本の「国際交流」、「多文化共生」事業のなかで暗黙の内に位置づけられてきた「日本人」と「外国人」の役割への視座が生みだす「ズレ」にあったと考える。そうであるならば「ズレ」を修正するための努力をすれば、外国にルーツを持つ子どもや青年のための教育支援や自立支援を、立場を踏まえ協力し支えあうことは可能である。今回、特に應義塾大学柏崎千佳子教授には、事業実施法人が関西にあるため構築しにくかった神奈川におけるネットワーク構築のために多くの助力をもらった。

今年度の成果としては、神奈川県において外国にルーツを持つ若者が、知識や経験を持つ人たちの存在を知り、顔の見える関係を作り、自分たちの力を活かし活動するきっかけは作りえたと考える。

1年間の助成期間という時間的制約がある中で不十分なことも多々あったが、知識、経験の共有に取り組んだ事業効果は大きかったと考える。

iii. エンパワメントへの道程

家庭における教育資源や社会資源の乏しい外国にルーツを持つ子ども・青年がエンパワメントする姿を一つの形で例示することは難しいが、エンパワメントできない姿は、似かよっている。

多くの外国にルーツを持つ子ども・青年は、自分たちの置かれている不合理や不条理の状況に気づくことができず、教育や進路について限られた情報のなかで自分たちの制限された将来像、未来像を考え、学力不振や教育中断に陥ることも多い。不安定な就労、早婚・若年出産・離婚による母子家庭での子育てなど貧困や不安定な家庭といった資源の乏しい社会環境のなかで自分たちの可能性を閉ざし、社会との接点を失い、刹那的な日々が次世代にも広がっている。

この循環が、主流社会の無関心や偏見を放置、助長することにもつながり、より一層、外国にルーツを持つ子ども・青年の努力が報われない社会へ導かれている。

努力が報われない社会は、閉鎖的であり、排他的であり弱い立場に生まれた者に残酷である。

一方的な理解は、時間の経過のなかで、まなざす側に合わせることしかまなざされる側の社会参加を許さない状況を生み出す。そうではない外国にルーツを持つ子ども・青年が主体的に社会へ参加する道筋・道程の創造、開かれた道を開拓し、社会を創造していく主体となれる仕組みをつくることが外国にルーツをもつ子ども・青少年のエンパワメントに不可欠である。

本事業において、(i) 状況認識と課題の共有、(ii) 知識、経験の共有を進めるなかでおぼろげながらエンパワメントへの道程をイメージすることができた。

本事業によってはじめた子ども食堂（みんなのダイニング）に来ている中国ルーツの子どもについて、幼少期に日本に渡りし、大学生となって本事業に携わる中国ルーツのボランティアが語ったエピソードのなかで、「（中国の）子どもが家でリクエストしても（親が）提供できない（日本）料理を日本人の若いジュニアコーディネーターが提供してくれる場所で、子どもが中国語を使っても気兼ねしない空気があることは、すごく居心地がいい」という言葉があった。日本のなかで育つ外国にルーツを持つ子ども・青年が抱える自然（ありのまま）を受けとめる場が、同じルーツを持つ者だけでは提供しにくいこと（場）を日本人の若者と協働することで提供することが出来たのである。

文化の交錯のなかで自分をとりまく環境変化や内なる変容を包摂し理解することが、日本社会で多様な文化背景を持つ人々各自の力を活かし協働することによって可能であることは、同じ背景を持っている者の生み出す可能性とは違う異なる背景を持っている者の協力だからこそその可能性を見いたす経験であった。

違いを不变や不動のものと捉えるのではなく、新しい環境のなかでハイブリットしていく外国にルーツをもつ子どもに寄り添うには、同じ背景を持っている者の可能性と違う背景を持っている者の可能性の協力関係、輪づくりが、エンパワメントへの道程には必要だということである。

そのことについて外国人当事者性が強調されるすたんどばいみーに日本人として関わり続いているいちょう団地住民当事者でもある馬場有希は、団地に住む日本人住民の困難も踏まえ、「当事者」という言葉に可能性を見い出し、次のように述べている。

「いちょう団地住民が力をつけるということは、当事者になるということであろう。多様性は、多様な対立構造のもとに多様な当事者性を生み出すだろう。当事者性とは一面的なものではなく、時と状況によって絶えず変化するものである。」「社会も、行政も、個人も『マイノリティであるとは何を意味するのか』『マジョリティであるとは何を意味するのか』ということをかんがえなければならないし、知らなければならない。つまり、マイノリティはマイノリティとして、マジョリティはマジョリティとしてその当事者性を受け、自らのなすべきことを模索していく必要があるのではないかだろうか」ということである。」このような自覚や覚悟の上での協力や協働の上に希望や未来があるよう筆者も考える。

それは、金高らが語る日本人と外国人の薄っぺらな「役割分担」ではなく、重層的な共有に裏付けされた人のつながりによって生まれるものであり、その基盤と葛藤がない中では生まれえない。また外国にルーツを持つ当事者の主体的な参加、存在なくしては、なりたたない。

また外国にルーツを持つ子ども・青少年のエンパワメントのためには、偏見や差別に対峙する方法の確立も必要不可欠である。本事業の学習支援の場において、日本名で生活している在日ベトナム人の小学生が、民族名で生活する在日コリアンのボランティアに対して「韓国人嫌い」、「中国人も嫌い」、「日本で生きるなら日本名にしたほうがいい」などの言葉を投げかけることが起きた。言葉を投げかけられた在日コリアンのボランティアが、状況を聞き取りしている中で発した当該の子どもから投げかけられた差別的な発言を受けて話した「自分たち（在日コリアンら）がそう思われる（嫌われる）のは仕方がないと思う」、「子どもを怒らないでほしい」という言葉の後にしぶり出された「苦しい気持ちがした」という言葉は重いものであった。

先の事例を受けて偏見や差別、人権をテーマとしたプログラムを教条的ではなく子ども、青年対象に実施することを考え、エンターテインメント作品でありながら偏見や差別がテーマとなっているディズニーアニメ「ズートピア」を題材にした研修を甲南女子大学野崎志帆教授に行ってもらった。この偏見と差別を考える研修は、普遍的でありながら個々、個人に課題をかえすことができる内容の深い研修となつた。

さまざまな本事業の取り組みを通して、今を生きる人々が、重層的な共有の基盤を持ち、個々の背景を活かし、人権を基底においた居場所を年齢に応じて作っていくことがエンパワメントへの道程と考えられることが確認できた。

3. 事業を終えて

当初予定した本事業単年度効果として以下の二点を掲げた。

- ①外国人家庭の貧困の連鎖や非行などの原因となる子どもの学力の改善と高校進学率の向上と定着

②外国人の子どもの厳しい現実と取り組みの大切さを認識できるボランティア（大学生など）が活動参加によって増大

上記について本事業が十分な成果を出せたかについては、単年度での成果検証は難しい点もあるが、本事業で生まれた外国人の子どもと青年を支える輪の広がりは、成果へ向かっていると確信している。また本事業を活用して実施した外国にルーツを持つ子どもがハンディキャップを乗り越えるための学習支援、学校での通訳、授業の付き添い、読書活動、子ども食堂等には、次代の社会事業の担い手となる多くのユースが携わり、リーダーとしての資質を育んでくれた。そのことは、想定を超える喜びであった。

本事業の本質は、人材育成と子どもの成長であり一定の期間が必要となるため、継続するための安定した財源の確保、事業の担い手の確保が当初から想定される課題であったが、事業の担い手については、本事業のコーディネーター、インターン、講師の大多数が、神戸、神奈川で位置づけは変わっても次年度も継続して子どもの支援事業に携わってくれる予定である。安定した財源の確保は、神奈川地域においては、愛川町での生活困窮者支援事業の一環として実施されている子ども学習支援（実態として日系ペルーカの子ども対象）事業を受託する予定が進むなど行政機関との連携、委託も進められている。

また将来の神奈川県での多文化保育事業展開を視野に入れ、神奈川在住の保育士資格者が、次年度より神戸市の在日ベトナム人児童が多数在籍する認可幼稚園での就労をはじめとする予定であり、多様な文化背景をもつ幼児を受け入れる現場での職場経験も予定している。

距離の離れた古くからの外国人多住地域と新しい外国人多住地域での協働実践であった本事業は、非常に困難な状況のなかで進められたため、多くの研究者、実践者、行政関係者などの大きな協力を得て進められた。時には無理なお願いをさせてもらうこともあった。

プロジェクトを代表して、協力者の方々に深く感謝したい。

最後に、いちょう団地の外国にルーツを持つ子どもらが、自分たちの団体（「すたんどうばいみー」）を作る時に名前をとったスティーブン・キング原作、ロブ・ライナー監督のアメリカ映画「スタン・ド・バイ・ミー（Stand by Me）」の主題歌になった黒人歌手、ベン・E・キングの名曲の歌詞を引用して本稿を終えたい。子どもにかかわる事業に携わる大人の一人として、人がなぜ一歩を踏みだせるかをとても考えさせてくれる歌詞なので。

When the night has come

夜が来て

And the land is dark

あたりは闇に包まれて

And the moon is the only light we'll see

月だけが僕らを照らす唯一の明かりになったとしても

No I won't be afraid, no I won't be afraid

僕はこわくはないよ

Just as long as you stand, stand by me

きみがそばにいてくれるなら

And darlin', darlin', stand by me, oh now now stand by me

だから 僕のそばにいておくれ

Stand by me, stand by me

そばで支えていてほしいんだ

If the sky that we look upon

もし見上げているこの空が

Should tumble and fall

崩れ落ちてしまっても

And the mountains should crumble to the sea

大地が砕けて海の底に沈んだとしても

I won't cry, I won't cry, no I won't shed a tear

僕は泣かないよ 涙なんて流さない

Just as long as you stand, stand by me

きみがそばにいてくれるなら

And darlin', darlin', stand by me, oh stand by me

だから 僕のそばにいておくれ

Stand by me, stand by me, stand by me

そばで支えていてほしいんだ

Whenever you're in trouble won't you stand by me, oh now now stand by me

もし困ったことがあったなら、いつでもそばにおいて

Oh stand by me, stand by me, stand by me

僕が支えてあげるから

(日本語訳：高橋愛満)

**神奈川地域における外国人の子ども・青少年
エンパワメント事業報告**

ジュニアコーディネーターとしての取り組みについて

チュープ サラーン（社会人：カンボジア難民）

1. 事業のための研修の成果及び課題（神奈川実施のみ）

神奈川研修① 日本における外国人待遇の変遷（講師：柏崎千佳子氏）

【日程・場所】 2016年9月4日（富士見文化会館）

【参加人数】 8人

【目的】

「外国人子ども支援インターン研修」の実施として、外国人の待遇と神奈川の実情を歴史的に見ていきながら、支援のあり方を考えるため、講演者の研究領域である在日外国人・マイノリティ問題や移民政策の観点から「日本における外国人待遇の変遷」について研修をする。

【研修の概要】

講演では、①日本の中の「外国人」と外国人・移民政策の流れ、②制度と社会のあり方と関連性、③実践に向けた課題の主な3つの観点から歴史的に概観した。

1点目は、「在日外国人」形成の歴史を振り返り、帝国の時代の植民地支配からおきていた台湾人や朝鮮人の差別について概観した。2点目は、オールドカマーの法制度と社会的差別の歴史を振り返り、その後増加したニューカマーの外国人・移民政策についてである。3点目は、現在の日本社会の現状として、人口減少や少子高齢化傾向があるなかで、外国人・移民を利用した形で受け入れているということである。

外国人・移民者は、歴史的に概観すると、日本社会から受け入れられていたというわけではなく、差別や偏見のなかで生きてきたという事が確認された。さらに、その後、法制度が整うなかで「日本」という国に受け入れられてきているが、それは、日本社会で不足する部分を補うという形で成されていたということであった。現在、外国人は増加傾向にあり、日本社会におけるマジョリティ側の制度と社会のあり方との関連性に対する意識が重要になってくる。

【成果・課題】

成果としては、研修で「日本における外国人待遇の変遷」についての講演を行ったことにより、歴史を振り返り、現在、将来の外国人のあり方や支援のあり方について考えることができた。また、日本人のインターンから「現在の子どもの現状は活動を通して知っていたが、外国人・移民の歴史のことは初めて知った」と知識が深まったとの感想があった。

課題としては、日本社会における外国人への差別や偏見は、歴史的に根付いており、現在に至るまで続いているなかで「外国人としてのあり方」や「外国人支援のあり方」を考える必要があるということである。参加者からは、外国人として立ち上がって生きるのか、社会に同化をされながら生きていくのかは、個人の選択に委ねられており、外国人の中でも様々な多様性があるということが指摘された。これらのことから、「日本における外国人待遇の変遷」を踏まえ、さらに外国人支援のあり方を検討する必要があることが全体の場で確認された。

神奈川フィールドワーク信愛塾訪問（講師：竹川真理子氏）

【日程・場所】 2016年10月2日（信愛塾）

【参加人数】 12人

【目的】

信愛塾の取り組みや今までの活動の歴史的な変遷と信愛塾に通う子どもたちの状況などに関する情報を共有すること。

【研修の概要】

信愛塾のセンター長である竹川氏による信愛塾の活動の変遷や現在横浜市内における外国につながる子どもたちの状況や周辺地域に増える来日間もない子どもの状況などのレクチャー、すたんどばいみーの活動紹介などの情報を交換する場となった。また、信愛塾では後継者として若いニューカマー青年を巻き込んだ活動、学習支援の場に参画させることを試みているとのことであった。

【成果・課題】

信愛塾は、37年という長い期間活動している団体であるにも関わらず、すたんどばいみーメンバーは情報を持っていなかった。信愛塾も、すたんどばいみーの名前は知っているだけといった状況を受けて、まずはお互いの活動を知るところから研修会は始まることとなった。信愛塾が発足した当時は、外国につながる子どもたちの小学校に入学するための通知が届かない時代であり、行政に何度も通知を発行させる交渉をした話はとても印象的だった。教育を受ける権利が外国籍の子どもたちに保障されていない事に対する異議申し立てを行政に働きかけて動かすという先人の取り組みは、大きな成果を残したと改めて感じつつ、行政との交渉においての連携の方法などお手本になる所が多くあった。一方、信愛塾にも名前しか知らないような自分たちの取り組みの発信の弱さを反省すべき点として改めて思い知らされた。一緒に参加した運営メンバーもとても感心した様子で話を聞きつつ、自分たち（すたんどばいみー）はどこまでやれるかと自問自答することとなった。



神奈川研修② かながわ国際交流財団の歴史的活動の変遷について（講師：富本潤子氏）

【日程・場所】 2016年11月12日（富士見会館）

【参加人数】 19人

【目的】

かながわ国際交流財団（以下：K I F）の神奈川における取り組みの歴史や現在の事業の状況などを学び、外国人の子ども見守りネットワークの拡大に活かす研修を行う。

【研修の概要】

財団で働く富本潤子氏を講師としてお招きし、神奈川で先行して活動しているK I Fの取り組み

についての研修会を行った。また、NPO法人が申請できる助成金等の紹介もしてもらった。当日の参加団体及び人数は4団体（KFC 4名、すたんどばいみー13名、在日カンボジア仏教伝統宗教支援委員会の活動中心メンバー1名、教育支援グループエドベンチャー1名）、計19名であった。各団体の紹介をし、その後は富本氏によるKIFの活動や取組みについてのレクチャーとなつた。また、外国につながる子どもへの無償の奨学金制度として、保育士の人材を育てる取組みなども新たに展開を始めたことなどの情報が提供された。

【成果・課題】

KIFのような大きな財団や信愛塾のような名の知られているNPOにすたんどばいみーの取り組みが認識されていないことは、活動を広げる際に連携を取りづらくさせる。そのため、今回はしっかりと自分たちの存在を知ってもらえるようにあいさつ回りをしたり、研修会を開催することでネットワークの拡大につなげる初めの一歩となつた。研修会には、参加者が4団体計19名となつたことも大きな成果と言えるだろう。特に、在日カンボジア仏教伝統宗教支援委員会で中心的に活動しているメンバーの参加者は、「今まで在日カンボジア人たちの寄付によっていろんな交流会や伝統を継承するためのイベント、祖国のお寺や学校の修復に充てており、今回の助成金の情報提供によって新たな活動を展開できると同時に自分たちのコミュニティ形成ができる」と研修会後にジュニアコーディネーターに感想として残していた。また、日本語を得意としないエスニックグループへの助成金申請補助も実施しているという有力な情報も得ることができた。助成金申請の手伝いもしてもらえることは、日本語や書類の記入を得意としない団体にとってとても役に立つシステムだと感じた。参加者は助成金に対する多大な可能性を感じた。NPO法人を続けるにあたって、安定した財源の確保は活動の大きな課題として立ちはあるなか、新年度にはそのような情報提供を基に申請を計画できるようになったことは、団体としても大きな前進となつた。



神奈川研修③「社会から外される経験を声や物語にするとは何か」（講師：グエン タン ティン氏）

【日程・場所】

2016年11月13日（渋谷生涯学習センター IKOZA 302講習室）

【参加人数】 28人

【目的】

グエン タン ティン（以下：グエン）氏は、幼少期にボートピープル難民として来日した父親に呼び寄せられ、日本の義務教育及び高校、高等教育を終えたのち、現在は母国ベトナムの日系IT企業で働いている。高校生時代には、数人の仲間と任意団体である「すたんどばいみー」を立ち上げ、活動に長らく関わるなかでルーツの大切さや日本人の排外主義的な政策に異論を唱えてきた。

そうした彼が日本から飛び出し、母国ベトナムで働くことを選択する背景を知るために研修会を企画した。

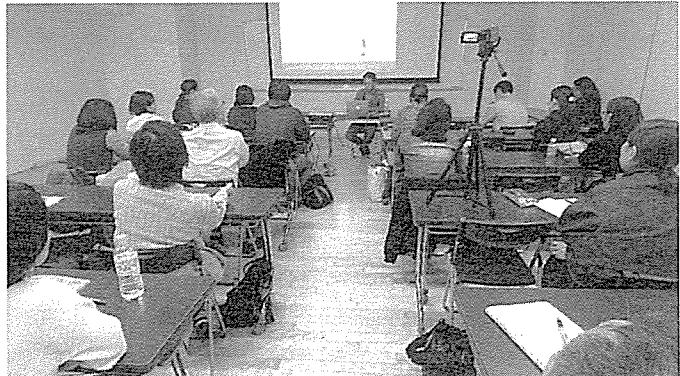
【研修の概要】

グエン氏によって準備された資料を基に、日本にいた当時のすたんどばいみーでの取り組みや活動を通して日本社会に向けて伝えたい事などの総括、なぜベトナムで働くことになったのか、ベトナムに渡るまでに欧米の多文化社会で何をみたのかをアニメーションを用いてプレゼン形式で行った。また、アメリカの新大統領である特朗普氏のような排外的で保守的な思想に対する意見の交換などフロアーを巻き込んだ活発な議論の時間となった。

【成果・課題】

当日、NPO団体や地域の小中学校の教員や一般市民及びグエン氏がすたんどばいみーで活動していた時の教え子など複数名の姿が見られ、予想以上に来場者が多い研修会となった。また、グエン氏によって準備された資料の中にアニメーションを用いたパワーポイントは、目でも楽しめるようなものだった。

研修会を実施した時は、アメリカの新大統領が決まったばかりの時期でもあり、排外主義や多民族国家を目指さない側が支持を得たことに対する意見交換の場ともなった。そのような社会の風潮になりつつあることに対して、我々の活動の基盤としてある「弱い者によりそう」ことが社会の底上げに寄与することを再確認しなければならないし、その重要性を表明することの大切さを改めて確認する場となった。



2. 事業のための運営マネジメント補助の成果及び課題

本事業を実行するために神奈川ではインターーンを5名採用し、「外国人子ども支援の充実」を目的に学習支援教室及び保護者の日本語教室における活動に参加してもらった。インターーン5名のうち、1名は留学により2016年8月からインターーンを離脱することになったが、留学後も継続して子ども支援に携わる予定となっている。活動に参加するスタッフは外国につながるルーツがあり、日本生まれ、あるいは幼少時代に来日し日本の公立学校に通った者と日本人の青年である。インターーンの内訳は社会人1名と、大学生3名、高校生1名で、4名は外国にルーツがあり、1名は日本人である。

本事業でインターーンへの交通費の支給が可能となったことにより、継続した活動参加を促しやすくなり、支援教室でのスタッフ不足を解消できた。またインターーン育成として、子どもの学習支援及び関係づくりや課題の捉え方などの整理を活動後のミーティングで設けることによって、外国に

つながる子どもの課題や困難を捉える事ができた。以下では、それぞれのインターンの成長について書き進めていくこととする。

まず、最年少インターンでありペルーにルーツを持つ高校生の長畠ハルミ（以下：ハルミ）は、主に子どもの学習支援を担当することとなった。就学前から中学生の学習支援に携わっている。高校3年生である彼女は、インターンとして参加する以前から卒業後は進学せずに、留学を希望していた。彼女は姉の紹介ですたんとばいみーを知りインターンとして活動に関わりを持つようになつたことで、語学以外の留学の意義を見い出すようになった。

彼女がそのように思うようになったのは、昨年の暮れあたりのことであった。活動とこれからの留学というモヤモヤした状況を抱えながら、日々の学習支援教室の場を過ごしていることを他のスタッフから聞いた。そのため、私やより広い知識や情報を得ている大学教員に相談する場を設けた。彼女の主な悩みは、留学よりも現在やりがいを感じているインターンとしての活動が今後どう継続できるかといったことだった。そのような状況において、留学をこのまま進めるべきかあるいはすたんとばいみーで試みている起業にコミットするかという選択に対し、整理がついていない状態だった。

しかし、話を重ねていく中で、彼女の中に新たな意味が伴った留学が浮上したのである。つまり、やりがいを感じている活動を抱えながら日本よりも外国人が住みやすい多文化社会が進んでいる国に語学留学し、経験を得るというモチベーションへと変化したのである。

彼女はインターンでの経験を通じて、次第にこれから自分が行くカナダというモザイク国家が織りなす多文化共生社会、あるいはそれらを支える現地のN P Oや福祉サービスに关心を持つようになった。また、学習支援教室以外にも研修会や講演会などの学習会にも積極的に関わった。彼女の社会活動に対する関心の変化は、今回のインターン経験の大きな成果の一つとしていえる。

続いて、大学生のNGYEN NHAT THUY（以下：トゥイ）である。彼女は日本生まれでベトナムにルーツがある大学生である。小学生の時から生徒としてすたんとばいみーの学習教室に参加し、高校生の時は子どもたちの学習もサポートしていたが、大学生になると同時に活動現場から離れていった。活動の場を離れる際に彼女は、活動現場の先輩からの期待と自身の能力にギャップを感じた、と話していた。しかし、一年近く現場から遠のいた後、すたんとばいみーの運営メンバーであり同じルーツを有する宮脇英理（以下：宮脇）や、中国にルーツがある劉麗鳳に声をかけられたことをきっかけにして、インターンとしての目的、到達するビジョンが明確になったこともあり、再び活動現場に戻ってきた。

彼女は、主に子ども学習支援及び家庭訪問活動を担当した。子どもたちの課題を自らキャッチしたり、教室運営やイベント企画などに率先して参加するなど、インターンとして現場に戻った彼女は、高校生の時よりも成長した姿を見せた。子どもに関わる活動の中で、特に家庭訪問活動は大きい意味をもたらしているように思える。具体的には同じベトナムルーツをもつ小学校6年生のCへの学習支援及び生活のサポートをしており、生活のサポートとしては食生活の指導に力を入れている。Cの家庭は親が別居状態であり父に引き取られているが、高校生の姉を筆頭に子どもたちだけで食事の準備をしなければならない状況にある。姉もアルバイトや学校、そして弟たちの世話など

多方面にわたる役割を背負い、栄養バランスのとれた食事が準備できていない日々である。家庭訪問活動の良さは、家庭の状況を直に見て課題とニーズを探りかれらの生活習慣に合わせたサポートができることにある。Cの場合、学習能力が向上しない背景に、生活の実態が学習意欲を促すところにまで向かわない状況があると言える。

親のいない夕食が日常化しているCのように、家庭環境を知ることができる家庭訪問活動を通じて、トウイは今年に入って日本社会でも問題となりつつある「孤食」に関心を寄せるようになった。

「孤食」や「共働き」家庭における子どもの孤独について、今後は自身や大学で学習を重ね、現場に持ち帰りたいと計画している。さらにトウイの成長ぶりとして、現場の子どもや運営に関する課題が生じると、速やかに先輩やジュニアコーディネーターにSOSを発信したり、同世代や後輩に相談する場を持てるまでになったことである。このような活動に対する姿勢からは、彼女が責任を負った存在として関わりを持とうとしている様子が伺えることも、成果として評価できるだろう。

次に、社会人という立場から活動現場に参加するインターンのチャン ソワンナリット（以下：ナリット）についてである。彼も中高、大学生の時からすたんどうばいみーに関わっている。社会人になり、日々活動現場に参加することが少なくなったことも自身の課題として長年抱えていたが、日本のIT企業で勤める上で学生のような拘束されない時間を持つことが難しいことは踏まえておく必要がある。一方で、今回彼が子どもの学習支援教室に通うようになった背景には、学習支援教室に通うADHDを抱える外国にルーツもつ中学生との出会いがあった。インターンとして中学生や小学生の支援に参加する頻度は少なかったが、中学生のMはナリットに会う事を楽しみにしていた。そのためナリットは、隔週ではあるものの学習支援教室に参加することとなった。学習支援教室の他にも、祝日に中学生が企画するイベントに参加、引率するなどの役割を担う事もあった。平日夜遅くまで働く社会人である一方、休みの日をこうした活動に充てるという時間の使い方は、一般的に考えて社会人では到底成しえることではない。日常的に関わることができないながらも外国につながる子どもに寄りそう活動を継続することを、社会人の立場から模索していたように見えた。

最後に、唯一日本人のインターンとして活動した清水眞飛（以下：清水）である。これまでの日本人参加者の傾向としては、卒業論文のためや海外生活・海外旅行の経験から、日本における国際的な場、あるいは支援に短期的に関わる日本人学生はいたが、清水のように継続して活動に参加し、かつ運営にも携わる日本人大学生は稀であった。清水は、トウイと同様に大学生であり活動現場も同じだった。同年代だからこそ気軽に話し合える関係が構築でき、先輩スタッフから出された課題にも共に取り組む様子が伺えた。外国にルーツがあるトウイは、子どもたちの状況や課題解決に対して積極的であり行動が早い一方で、清水は、消極的で躊躇しているところがある。清水のこのような姿勢に対してトウイが苛立ちを抱くこともある。例えば、今年高校受験をするKをめぐっても外国につながるインターンと日本人インターンとでは考え方がややズレていることがあると話していた。トウイやハルミはKの焦りのない態度に危機感を持ち、学習意欲を掻き立てたいと考えたが、自分たちの年代が中学生と近いかつ、異性であるため聞き入れてもらえないのではないかと仮説を立てた。そこで彼への対応を年上あるいは別の観点から話をしてもらおうと試み、まずは年代の若い清水に説得してもらおうと依頼した。しかし清水からすれば、自分が日本人という立場でそ

の子に直接話していいのかどうか、あるいは話したことで相手が気を悪くし教室に来なくなるのはなどと躊躇してしまうのである。その間、早急な対応をして欲しいと思っているハルミとトウイからすると、清水が考えをまとめ行動するまでに、Kが手遅れになるのではという不安もあることからしばしば意見の対立が見られた。こうした現場の運営や子どもへの対応をめぐるインターンの話し合いは何時間も必要となる。

若者が社会貢献活動に継続的に参画することが難しい状況がある中、すたんどばいみーでのインターンとして活動することが可能となるには、高校生や大学生あるいは大学院生という時間的な制約がないことが大きな条件になると思う。学校や家庭における適応や意思疎通が難しく、問題が常に伴っている子どもに対応するためには、フレキシブルな時間が欠かせないということは念頭に置かなければならないだろう。さらに、子どもにとってかれらと直に関わるインターンの歳の近さがいい影響を与える場合もあればそうでないこともあるということもまた、子どものニーズにそった支援をする上で確認すべきことである。

3. 事業のための現場コーディネート補助の成果及び課題

ここでは、主に大人の日本語教室の講師として活躍した中国にルーツがある劉麗鳳や母語教室のベトナム語講師である宮脇英理に対する、ジュニアコーディネーターとしての現場コーディネートの成果及び課題をまとめていきたい。

昨年の新規事業として大人向けの日本語教室を実施する試みを始めた。講師として、日本人はもちろんのこと、そのほかに外国籍の大人のニーズを把握することを目的に外国にルーツがある者を運営スタッフとして配置した。外国にルーツがある講師が教室を開いているためか、毎回の参加者は最低でも平均して10人前後と盛況であった。また、学習者の来日年数や日本語の到達度にバラつきがあるため、入門・初級・中級の3クラスに分け、講師をそれぞれ配置するという現場のコーディネートを行った。ある来日3年未満の学習者は、「体調に不調がある時に会社の人や医者に事情を説明できない」という困難を抱えていた。その際、我慢するかあるいは友人がいれば依頼して病院に連れて行ってもらう、または翻訳した紙を医者に見せるなど工夫が必要であり、言語に不自由を抱えているが故になかなか日本で自立した生活を送ることができない状況だった。学習者の中には、一週間で耳にした日本語をメモして、日本語教室の講師に教えてもらう者もいた。

日本の文化を知ってもらうために、夏はクラスの交流も兼ねてバーベキューを企画し、正月には地域の青少年相談室にある臼を借りて餅つきを実施した。こうしたイベントを介した日本語の学習は、彼らにとってとても楽しめる時間となった。

ベトナム語講師として活躍する宮脇に対する現場コーディネートは、彼女にゆだねた部分が多く、ジュニアコーディネーターとして特に活躍する場はなかったと言わざるを得ないだろう。唯一、講師が2017年4月より神戸で仕事が決まったため、ベトナム語教室を存続させるための運営や講師の確保ができるように、次世代の若者を育成できるようアドバイスをした程度である。そのような育成は、昨年の夏から始まっており、今は宮脇に続く、2人のベトナムルーツの人材を確保できるようになった。

4. ジュニアコーディネーターとしての成果及び課題

今年初めてWAMの助成金を受けて事業全体のジュニアコーディネーターとして組織を運営する、貴重な経験をした。何よりも外部発信のノウハウが弱い団体であるため、記録や参加人数のまとめ方、教室運営の調整、外部の関連団体へのあいさつ周りなどあらゆる場面でのコミットとコーディネートが求められた。

特に、2016年から大人を支援する新規事業として開催した「日本語教室」の試みは、現段階で総括できるほどの成長はみられないが、ひとつ評価できるとすれば外国につながるスタッフ及び講師が教えていることによって、母語が通じるという安心感から参加人数が多いことである。また活動に関わる経費があることで、必要な機器や文具を入手することができ、例年ないほどに子どもや大人への円滑な支援をすることができた。

しかし、自身への課題としては、ジュニアコーディネーターとしての連絡・調整・計画・企画においてはまだまだ能力不足であると言わざるを得ない。計画を遂行するための準備や期日の面でKFCスタッフをはじめ、インターンや講師などのご協力を得なければ遂行することができなかつた。一方で「自立」を考えた時に、いろんな人の力を借りながら「自立」することの可能性もあるのではないかと思う部分もあった。それにおいて今回の「協働事業」を通してたくさんの方々と繋がりが持てるようになれたことは神奈川で活動する私たちにとって大きな変化となったことは間違いないだろう。

インターの活動を通して感じる就学前の子どもたち

長畠 ハルミ（高校生：日系ペルー）

1. インターに参加したきっかけ

私は自分が留学するにあたって、すたんどばいみーが運営する就学前教室のことを知り、インターに参加した。初めて教えたときに就学前の子どもたちは、自分が普段話す言葉では理解できないのだと知った。なぜなら彼らは日常でそれぞれの母語を使い、日本語の話し言葉に慣れていないからである。私は正直1回目で気が遠くなつたが、その反面、分かりやすい教え方に興味をもつた。そこで2回目以降は他のスタッフのやり方を真似するようにした。やり始めるうちに自分なりの教え方を発見することができた。

また、就学前教室の子どもはあまり自分から話しかけることがなく、私も初対面の人に話すことは苦手だったため、勉強についての質問や教えるときだけコミュニケーションをとっていた。しかしこのままでは子どもとの信頼関係を作れるわけがないと思い、家の遊びや、好き嫌いなどについても積極的に話しかけるように心がけた。それによって、具体的に聞く事が子どもの思いを引き出す鍵になるとを考えた。今は、子どもが無意識に抱えるストレスも知ることができるよう積極的に話しかけることを続けている。子どもたちが私に話してくれた事を、これから先子どもが他の人にも伝えられるように、子どもたちの日本語の力を高めていきたいと思っている。そして私は就学前の子どもにとって信頼できるスタッフでありたい。

私は今年の春から留学をするにあたり、他の国に住む外国につながる就学前の子どもが受けている教育に興味を持つようになった。日本で育ち日本の教育を受ける外国人の子どもがいる一方で、母国で育ち途中で来日する外国人の子もいる。これらの子どもの違いや、他国で同様の環境にいる子どもとの違い、暮らしていく上での困難や苦労を知りたい。また、私が学んだことをすたんどばいみーの子どもと照らし合わせながら違いを見つけ、就学前の子どもの教育に役立てたいと思う。

2. 活動で関わる子どもたちの変化

i. 信頼関係をつくりたいと思ったきっかけ

イベントなどを通して私は子どもとの信頼関係があまりないのではないかと思った。クリスマス会を行ったときに皆でご飯を食べており片付けを始めようとした時、一人の就学前教室の子どもが泣いた。食後にパフェを用意していて、自分で冷蔵庫に取りに行くシステムだったが、その子は「冷蔵庫」「食後」という言葉の意味がわからず、そしてパフェを食べたいという気持ちを自分の言葉で伝えられなかったのだ。また普段教室の時間が彼らない小学生の子どもやスタッフがいたこともあるかもしれない。その子の反応に対して私は、「近くにいた私に声を掛けてくれれば良かったのに」と思った。クリスマス会が終わり皆で和室に荷物を取りに行く際、彼女はまた泣いた。その時は、その子が自分で話す事ができず、またスタッフが話しかけてくれる事に慣れてしまつたのではないかと思った。その一方で、自分が思っている以上に私はまだ信頼関係が作り上げてられていない

かつたのではないかとも思った。普段の教室では無口な女の子なので人前で話す恥ずかしさもあったのではないかと感じた。彼女は日本語と母語の二か国語を少しづつしか話すことができない。例えば勉強中に「ラーメン」「カレー」などの名前が分からぬときがある。私は携帯の中国語辞典で検索するがそれでも彼女がわからない単語が多々見られる。そのことから、彼女は「まだ教室に慣れていないから」という理由ではなく、身についている言葉の数自体が少ないのだと考えた。だから私はその子にもっと言葉を教えてあげたいと思った。彼女は二年前に日本に来日した。中国で暮らしていた頃はよく話していたが、来日後に口数が減ったと祖母から聞いた。両親は中国語を話す事はできるが日本語を話す事ができず、共働きで普段から会話すること自体が少ない。母は娘の口数の少ないと心配しているが働きに出ているため、話す機会があまりない。両親と会話をする機会が減った影響で彼女も話すことを辞めてしまったと考えられる。この様な環境で現在彼女は育っており、外部で身に付けた少しの日本語すらも発する場所がない。私は途中で来日する子どもにとって難しいことが何かを、彼女に会った事で考えた。誰も知り合いのいない場所で、友達を作りたくても日本語を話す事ができなければ不安に感じる事が沢山あると思う。これは、子どもにとって大きなストレスになるかもしれない。周りに彼女の環境を整えてくれる人はいるのか、彼女の現状に気づいてあげられる人はいるのか心配になった。これから彼女がどうしたら日本で安心して生活することができ、語彙を増やして自分のことを話せるようになるかを考える事が私の課題である。しかし、彼女は無口でも遊ぶときはとても楽しそうである。休憩の時間にはいつも教室のある施設のカウンターでおもちゃを借りるが、色々なもので遊んでみたいという好奇心があるのか、毎回違ったもので遊んでいる。私は、それはとても良いことだと思う。信頼関係は子どもの繋がりができるからこそ成り立つものだと私は思っている。繋がりを持つことで子どもは勉強だけを目的にせず、日常の出来事を話すために教室に通うようになる。家庭環境についても聞き出すことで、その子が抱えているストレスなどを解消してあげることができるのでないだろうかと私は考えている。

ii. 二人の共通点

就学前教室には二人の子どもがいる。一人はB（中国人）、もう一人はC（インドネシア人）である。Cには小学生の姉がおり、姉は学校にベトナム人が多いことからベトナム語に興味を持ち、就学前教室の隣で行っているベトナム語教室に通って勉強をしている。そのため休憩の時間になるとCは姉と一緒に遊ぶことが多い。時々就学前の子どもだけで遊ぶがお互い人見知りなのかあまり話す事はない。しかし二人には共通点がある。それは負けず嫌いという事だ。普段の教室では勉強しか行わないが、ある時子どもが疲れた様子を見せたため、普段勉強をしているひらがながしっかり身についているかの確認も含め、かるたで遊んだ。二人の様子はとても楽しそうであった。しかし枚数に差がつくとお互いに悔しそうな顔をしていた。ここで私は二人が負けず嫌いなのだと知った。勉強時間、休憩時間では見られない表情があるのだと学んだ。私は子どもの色々な一面や表情をもっと見られたらいいなと感じた。共通点が見つかった二人であったが次の週にはお互い話す事はなかった。いまだに自分達に共通点があることに気づいていないが、私がその場で一声かけてあ

げることで気づいてもらえたのではないか。私は普段話さない彼女たちがこの共通点をきっかけに協力関係に導くことを考えた。しかし二人が協力関係になることはなかった。一つ思った事としてBは、Cに姉がいる事に対して嫉妬しているのではないだろうか。少なくともCは日本語が話せる。Bは自分がCのようになれないため、無意識のうちに対抗心が芽生えているのではないか。

3. すたんどばいみーの就学前の子に必要なもの

すたんどばいみーの就学前の子どもに必要なことは、自己紹介など、自分のことについて話すことだと思う。就学前の子どもは、ひらがな、カタカナの五十音表、自分の名前は書くことはできるが話す事はあまりない。理由として普段の教室では一方的にスタッフから話しかけ、子どもが話していないからだと思う。スタッフがもっと「これはどう?」などと問うことで、彼女たちに自分の持っている少ない日本語の語彙でも話す機会を与えることが可能であると私は考えている。言っていることが間違っていればそれを直してあげれば良いのではないか。教室の風景として多く見られるのは、休憩の時間に施設のカウンターでおもちゃを借りに行くが、カウンターに着くと「あれ」と指で指すことが多い。ひらがなが読めるにも関わらず、なぜ「あれ」としか指さないのか疑問に思った。これも普段スタッフが一方的に話していることに関係があるのではないかだろうか。そしておもちゃの名前が漢字で書かれてある場合は読めないのが当たり前だが、色などを伝えれば少しはカウンターの人に伝わるのではないかとも思った。しかし彼女たちが色についての勉強をしてこなかつた事にも気づいた。何より彼女たちは人に物事を頼む時のパターンを一つしか知らないのではないかと思った。私の最終目標は彼女たちに一人でもおもちゃを借りに行けるようにすることだ。そのためには日頃の教室でのコミュニケーションが必要だと思った。就学前の子はスタッフと一对一で話す事が多く見られるのでそれを子ども二人に対してスタッフ一人の三人でコミュニケーションをとれるようにしたいと考えている。これをきっかけに自分の事を恥ずかしがらず自己紹介ができるようになり、二人も今以上に仲良くなり勉強中にも話している様子を見ることができたらいいと思っている。

就学前の子どもたちは日本人が日本語指導をする事があまりない。しかし私の指導は日本人に近い外国人の方法だと思う。なぜなら私は幼いころから外国人だけでなく日本人との関わりも多く、外国人でありながらも日本人と同じように育てられたからである。そこには、日本語でコミュニケーションをとるために最低限必要な語彙力が身につくよう、両親が鍛えてくれたという背景がある。また、精神的な差別を受けた時に強い心を持つように育てられてきた。その計らいは、両親自身が差別を経験し、子どもには繰り返したくないという思いがあったからだ。そのため、正直私は外国人としての差別や嫌な経験をしたことがあまりない。そして子どもたちの抱える外国人としての悩みもあり共感してあげることは難しいと思う。なぜなら、私は日本の環境に慣れるために自ら何かしてきたわけではないからである。すたんどばいみーの教室に通う子どもの家庭の多くは外国人だからという理由で差別を経験している。そしてそれをきっかけに日本人との関わりを減らした結果、子どもが同じように差別を受けている。私が得られたような親からのサポートがなく、子どもにも同じ経験をさせるのは違うと思う。だから私は、日本人との関わりを諦めてしまった親の子ど

もがどのようにすれば日本の社会に繋がっていくのかと一緒に考えていきたい。私が教室で教えている子どもの中には「外国人」という意識を強く持っている子がいる。私は日本人と近いコミュニティで育ってきたため、その意識はあまりなく羨ましく感じることもある。一方で、日本人の考えを全く知らずに自分の国だけを「大事にする」ことだけがいいとは思わない。ただ自分の国だけを主張していると差別などに繋がるのではないかと思う。外国人が日本のルール、生活に慣れることは大事だと思う。よく大人の外国人が日本人に対して「日本人は冷たい」と言っているのを見てきた。このことから日本人がどのように考え、外国人に対してどう考えているかを知ることは大事だと思う。それを知ったうえで自分の持っている外国人としての考えを大事にしていってほしい。

わたしたちにとって必要なこと

NGYEN NHAT THUY (大学生：ベトナム難民)

1. すたんどばいみーの活動に参加したきっかけと活動を継続することの意味

私は、小学生のときからすたんどばいみーが運営する教室に通う生徒の一人だった。高校生になり教える立場として関わり始めた頃、私にとってすたんどばいみーはなんのために行っているのかよくわからない場所だった。ただ言われたことをこなし、他のスタッフの真似をして活動をしていたが、教室を運営する側としての責任やプレッシャーに耐えられず、つらかったことを覚えていた。これまで私が関わってきたスタッフたちはボランティアに時間を費やし、活動を継続してきた理由を「子どものため」だと口をそろえて言っていた。私はその言葉の意味を、大学2年生になった今年、インターンとして活動に参加する中で少しづつ理解し、私が活動する必要性を見いだせるようになった。確かに答えではないが、「外国にルーツを持つ子どもがいる限り、同じ境遇である自分たちが経験してきたことを伝え、教えなくてはならない」ということではないかと思う。自分が経験しているからこそ、子どもたちの気持ちに寄り添い、一緒に考えられることが多くあると思う。この1年私が一番寄り添い、考えた活動は小学生教室である。その中で見えてきたいくつかのことを述べたい。

2. 活動から見えてきたこと—親子の関係性から見える子どもたちの状況

i. 「孤独」を感じる子どもたち

① 母国を往来する親に取り残された子どもたちの気持ち

子どもを支援していく中で、子どもを叔母やいとこの家に預けて親が帰国をする姿が見られる。預け先が子どもの住み慣れている地域から遠い場合もあり、長い距離を歩いて自分の家と行き来することもある。また、帰国の際に親だけでなく子どもも一緒に行く場合もあるが、学期中でも長期で行くことが多いため、子どもの学習進度が遅れることがある。それが原因となり、クラスで学習に遅れてしまう子どもは少なくはない。

② 日本で生活するために共働きする親たち

共働きで子どもよりも朝早く出勤したり、夜遅くに帰ってくる親がいる。きょうだいがいても成長するにつれて塾に通うなど夜も外出しているため、小学生の子どもだけで過ごすことになる。中にはほぼ毎日一人でご飯を食べたり、親が買ったおもちゃで遊んで過ごす子どももいる。その場合、親が帰宅してから寝るまでの数時間が、子どもにとって唯一親と過ごせる時間となる。家族の生活費や教育費を賄うために仕事は必要だが、子どもたちとの心の距離が開いてしまうこともある。

③ 親から子に対しての期待

教室で子どもと接していると、今の子どもたちはとても忙しいと感じることが多々ある。親が過

去にお金や時間、家庭の事情などによって経験できなかつたことを子どもに託すことがある。例えば、通訳で入った小学校で、2016年7月に来日し、9月から小学校に通う男の子がいる。彼は国際教室で1年生から3年生までの漢字を勉強し、クラスでは彼がまだ習得できていない日本語で行われる授業を受ける。彼の1週間を聞くと「家事の手伝いはもちろん宿題や空手もお父さんから習う。」と話していた。お父さんが空手をやっていたからというのもあるが、いじめにあわないようという本人の意思もあった。しかし、親からの期待が大きく彼自身にとって重荷となっているところも見うけられる。最近では勉強に身がはいらず学校の先生に相談もしている。

ii. 教育熱心な親の戦略

外国人の親は教育熱心な人が多いため、子どもを平日は学校だけでなく塾に、週末もボランティアが運営する学習支援教室に通わせている。また、家の中でも学校や塾の宿題をするように呼びかけている。そんな中で、子どもは親とれるコミュニケーションが限られ「孤独」を抱えている。中学生になると家の中だけでは息苦しく感じ、夜遅くまで外を出歩くこともいちょう団地内では珍しくない。加えて外国人の子どもは日本語が十分に理解できない親の通訳として、用事に付き合わねばならないことがある。授業がある平日でも関係なく、学校を休まざるをえない。また、学校から親あてに届く書類は親も子も理解できず、すたんどばいみーのスタッフが代わりに対応することもある。すたんどばいみーは子どもだけでなくスタッフも外国にルーツがある者が多いため、外国につながる子どもたちの抱える様々な困難に寄り添えるという強みがある。例えば、親と子どもは度々けんかをするが、外国人の親は日本語が通じず母語で子どもに話しかけるのに対し、子どもは自分が一番話しやすく・考えやすい言葉（日本語）で話すため、親子で会話ができないこともある。そんな時、スタッフは子どもたちが親に対して不満に思っていることを聞く。最初は不満ばかりをぶつける子どもたちも、スタッフとの対話を通して親の考え方や視点を少しづつ理解し、次はどういうに親と交渉しようかと考える。

iii. 言葉によってつくられた壁

来日した子どもや日本生まれの外国人の子どもが抱える孤独と、言語面から生じる親との軋轢について上でも述べてきたが、彼らの抱える悩みは日常生活における会話にまで及んでいる。子どもは、小学校に入るまではほとんどの時間を親と過ごすため、母語で不自由なくコミュニケーションが取れる。しかし入学をきっかけに親と話す機会が減ると、次第に親との会話ができなくなる。なぜなら学校で新しく日本語を勉強し、母語よりも日本語を使う時間が増えることで、日本語で考え話すようになるからである。一方親は日本語を少し話せても、自分が使い慣れている母語のほうが話しかけやすいため母語で話す。すると、家の中では日本語と母語が混ざった会話が飛び交い、中途半端な言語を使って意思疎通を試みるようになる。このように子どもが一生懸命勉強に取り組み、親が応援をすればするほど、言葉の壁が少しづつできてくる。

3. 活動で関わる子どもたちの変化

私にとって二人の子どもの関わりが、子どものために活動する意味を見出すきっかけになった。一人目は小学生教室に通うCである。私は、彼にとって家族以外の寄り添える人だと思う。しかしそう言い切れるようになるまでには長い時間がかかった。最初に私がCを担当することになったときは、他のスタッフのアドバイスを取り入れながら関係性を作ることに必死で臨機応変に対応できず、Cは私の呼びかけに応えもしなかつた。以前Cと信頼関係のあったスタッフがもういないということもあり、教室に来ても「楽しくない」と逃げていた。そんな時に私が「おいでよ」としつこく追いかけていたために嫌われ者扱いをされていた。やつとの思いで一緒に勉強をしてくれるようになっても連絡なしに欠席をすることが多く、なぜCはこんなにすたんぽいみーを嫌っているのか、私が彼にこだわる理由は何か、と自分の活動の意味を模索していた。でも、後になり思うところだわったから、本気でCと向き合うようになった。今まで私は感情表現が苦手だったが、教室に来ている他のどの子よりもCに対して本気でぶつかることができた。C自身、今まで進んでは来なかつたすたんぽいみーで勉強などに向き合うようになった。今では、普段の教室では態度に出さないが家庭訪問や教室の連絡をすると「次は、いつくるの?」「ね、トワイ!トワイ!これ見て!」と自分が頑張ったことなどを私に強く表現することがある。お互いに自分の苦手な分野を乗り越えるための刺激になっていると思うと、彼のことを追いかけて考えてきた時間は正解だと感じる。

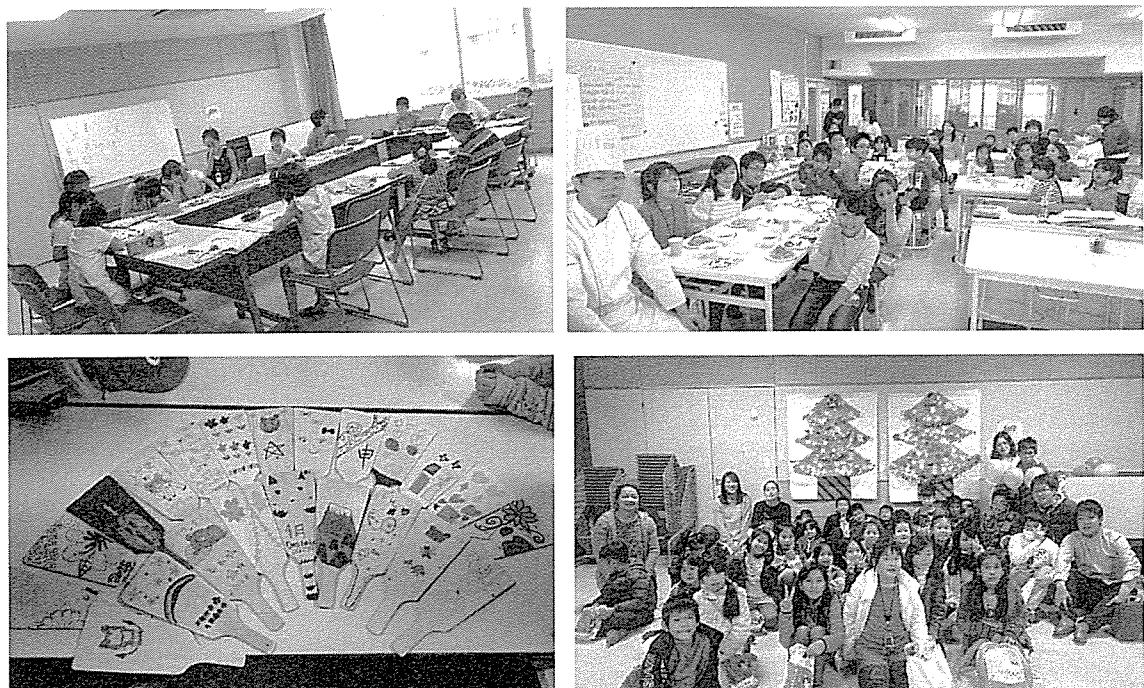
二人目は中学生教室と月曜日に行われる教室に通っているAである。Aと月曜日の教室に通っているMとスタッフの5人で遠足に行った時、心配されがちのMにスタッフが集まっているのを見たAが「どうせみんなMのところに行くよ」と言った。もともと、私はAの担当だったにも関わらずMについていたのが今回の発言に繋がったと思う。しかし今回の遠足だけではなく普段の教室でも、Aはスタッフを必要としているサインを出していたかもしれない。私はそれに気が付いていなかった。今回の遠足での出来事を通し「私がAについてあげなければいけない」と強く感じた。AやCとの関わりによって、やっと私だからこそできることが見つかった。

4. これからの展望

私が来年度の小学生教室の代表になる。きっかけは、今の代表が1年間神戸に行くことになったこと、そして私が高校生の時に一度小学生教室を担っていたからである。その時は、スタッフに誘われ1年間副代表を、翌年に代表をした。当時は、頼りになる年上のスタッフがいる環境だった。しかし今はもう私が大学生になり、すたんぽいみーの教室運営を見てきているため、自分にも周りにも言い訳はできないと思っている。まるで、この機会を逃したらどうしたらいいかわからない受験生が、受験当日に面接を教室の外で待つみたいにとても苦しく、今にも不安で胸がおしつぶされそうな状態である。その一方で、「もしかしたら新しいことができるチャンスかもしれない」という思いもある。次の1年間は、今までにないような教室になるようにゆっくりと時間をかけて次の副代表と頑張って作り上げたい。

私は大学に入って初めて、どれほどすたんぽいみーに守られていたのかに気が付いた。すたん

どばいみーに通っていたときは、スタッフが私の意見を聞き、「トワイが言いたいのはこういうこと？」と私の代わりに言葉してくれていた。しかし、より大きな社会に出たとき、自分の気持ちや考えを表現しても全員に伝わるわけないと知った。伝えたいことが、伝わらないときは自分自身が惨めな気持ちになる。すたんどばいみーの子どもたちが同じ思いを経験していると思うと、私が高校生の時にスタッフにしてもらったことと同じように、次は自分が子どもの話を聞いて言葉にしていかなければいけないと強く感じた。今まですたんどばいみーの活動をする時には一切周りと比較をしたことがなかったが、大学生になってから自分と周りを比較するようになった。「自分が伝えたいことをうまく伝えられなかった原因はなんだろう」と考え始めるようになったからだ。私が思う周りと自分の差は、言葉のキャッチボールがうまくできるかどうかだと思う。大学生になりサークルや授業で知り合った友人と生活していく中で、うまく感情表現や言葉がけができず周りとのように関係をつくつたらいいか悩んだ。大学1年生の時には地元とはまた別の外国人の友達ができた。その子とはサークルで知り合ったが、人と関係性を作るのがとてもうまく羨ましかった。一方、私はその子のような行動や言葉がけをしようとしてもいつも空回りをしていた。このように自分のなかで葛藤をした時期もあったため、私は教室にきている子どもたちに寄り添い安心できる場所をつくり、子どもたちには新しい社会に出たときにも他人に自分の思いを伝えられるようになってほしいと思う。



(小学生教室の様子)

Mの支援の始まりとこれから

チャン ソワンナリット（社会人：カンボジア難民）

1. M支援の始まり（これまでのすたんどうまいーでの支援の経緯から）

Mとの関わりの始まりは、Mの母親からの相談であった。それは彼が中学校1年生に上がって、不登校になった頃のことである。まずはMについて説明しよう。

Mはペルー人の父と母の間に生まれた。幼少期、ペルーで自閉症と診断されたあと、小学校高学年から特別支援学級に通うことになった。中学校に上がってから、特別支援学級と普通学級を行き来していたが、中学校1年生に入ってしばらくした時に、不登校状況に陥ってしまった。彼が不登校状態になった背景には、自閉症であるMに適切な配慮と支援ができていなかった教師とのトラブルの蓄積があった。先生に対してまったく信頼できなくなってしまったのはMだけでなく、それまで一人でMを支え、学校に行くのを励ましてきた彼の母親も同じであった。母子家庭でありMを大事に育ててきた母親は、すたんどうまいーに来るに至るまでに他のボランティア団体、行政機関、もちろん学校の先生など様々などころで相談してきた。しかし、Mや母親の声、言葉を真剣に受け止めてくれる場所はないどころか、「クレーマー」扱いされていたのである。Mの母親から相談を受けたとき、彼女の目に涙が浮かぶ場面もあった。「お母さんが甘やかしている。だからMが成長しないのだ。」と、これまで一番Mを守ってきた母親に投げられたこのような言葉によって、彼女自身が追いつめられていた様子さえも見られた。

障がいを持っていること、外国人であること、かつ母子家庭であることなど、Mには支援が必要であることは明らかであった。しかし経験がない中、果たして必要な支援ができるのだろうか。こうした不安な気持ちを持ちながら、Mへの支援が始まった。中学生教室に参加し、他の中学生と同じ教室で学習しながら、Mへの個別対応をする教室を作り、週2回の支援活動が始まった。

2. 現在の活動内容と活動をめぐる他機関との連携

Mへの支援が決まり、中学生教室の他にMの特別支援を行うための教室も始めた。これまでの活動の中で、特別支援学級に通う子どもたちもいたが、どんな支援が必要かという課題はずつと残されていた。Mには専門的な知識を持った先生がいたほうが適切な支援ができると考えた末、小学校の養護教諭だった先生に声をかけ、一緒に行うことになった。

しかし、最初の頃の支援活動は模索の連続であった。彼が初めて教室に来たとき、ちょうど中学生教室の小イベントで、みんなで映画を見ていたのだが、映画に出てくる男性と女性のキスシーンを見たMは、「もう行きたくない」と教室に来ることを拒否した。母親の説得によってようやく教室に来たのだが、教室に通うには母親の送り迎えが必要であり、学習中も彼が安心できるように待っていたことわざがあった。他の中学生とトラブルが起きたり、距離を置かれたり、反応してもらえないかったりすると、Mは傷ついてしまう。教室から出て床に寝転んでいたり、興奮した状態が抑えき

れず壁や机に頭をガンガンぶつけたりすることもあった。そして、彼がよく口にするのは、「僕はダメな人間なんだ、どうせ僕は…」といったような、自分を否定するような言葉づかいだった。

Mをどう支援していくのか、Mをよりよく理解し、より適切な支援を行うために、知的障がいについて知っている専門家に話を聞きにいった。その中で、自閉症の特徴として、集中力が続かない、耳で聞くよりも目で学習できる、自尊感情が低いなど、長所と短所について説明を受けた。特に、嫌な感情が残るので、Mの成功体験を増やすことが大事であるということも重要なポイントとして理解した。こうしたアドバイスに基づいて、教室の中では養護の先生と一緒にMのためのカリキュラム作成が始まった。他の人とトラブルが起きたときは、すぐに解決してMに嫌な感情が残らないように気を付けた。また、集中力が続かないことが分かったため、10分学習して休憩すること、Mへの指示や説明はなるべく物や絵などを使って説明すること、そしてMが感じていること・嫌がっていることを丁寧に聞くことなどを心掛けて支援活動を行った。Mへの理解を促すために、教室に来ている他の中学生にMの状況を説明した。思春期であるMが性的な興味を抱く傾向が顕著にみられたとき、先生を招いて思春期のことをどう話せばよいか、Mにどういった対応ができるのかについても学習した。Mの母親の負担を減らし、Mが母親から少しでも自立して行動できるようにするため、母親の送り迎えではなくすたんどばいみースタッフによる送迎を行ってきた。学校に通っていないため時間感覚を身に着けることが難しい点から、Mに時間を意識するように接してきた。また、Mを支援している他団体、学校の先生、行政機関と2か月に1回の会合を設け、お互いに情報交換も行ってきた。毎回の活動は記録に取り、Mの支援会合に参加している学校の先生や行政機関にも送った。

Mは4月から3年生になる予定である。学校に行くことはまだできていないが、すたんどばいみーの活動にはほぼ毎回参加している。久しぶりにMに会った人たちは、みんな彼の変化に驚く。自傷行為はほとんどなくなり、学習に集中できる時間がますます長くなってきた。母親の支えもあり、Mは着々と進歩しているのである。

3. 活動から言えること

支援活動を通して、Mに以下の変化が見られた。第1に、「名前を覚える」「考える」ことができるようになってきた。スタッフの1人である私のことを覚えるまで、2ヶ月くらいがかかった。毎回「この先生の名前はなに?」「僕の名前はなんでしょう?」と聞くが、最初の頃、Mは「分からない」と答えることしかできなかつた。そのため、話す中で名前を呼んでもらったり、帰り際にまた名前を聞くなど反復していった。その結果2人ほどしかスタッフの名前を言えなかつたところを、今では5人の名前を言える。これは一つの大きな成長である。「先生」という個人を特定できない名詞ではなく、名前を呼びその人に話す、訴えかけることができるようになることは大事である。

第2に、以前は学習面でも難しいことはすぐに「分からない」「できない」と言い、自分の力量を越える事に対して、拒否反応が出る様子が頻繁に見られた。今でも多少そのような反応をするこ

ともあるが、それでも「こうやって解くよ、この問題と一緒にだよ」と教える事ですぐにできるようになる。「成功体験」を少しづつ増やしていくことに加え、「褒めること」も重要である。

「こういうところは優しいよね」、「こういうところはMのすごいところだね」、「やればできるじゃん」など、会話の中に褒めることを取り入れて、Mという存在を認めることでM自身が大事にされていると感じ、そして自分を大事にする考えを促す事も行ってきた。そうしたたくさんの積み重ねが、「高校に行きたい」という意欲にまでつながったと言える。

ただ、なんでもかんでも甘えることすべてにYESとは言わず、状況に応じ身勝手なことや自身に都合がいいだけの要求などはしっかりと「本当に今それをしていいのか、どうしてそうしたいのか、周りの人はどうすればいいのか（どう思うのか）」と、関わる人の気持ちを考えてもらうこともまた「大人」として成長するための支援として重要である。

感情を汲み取り、一人で抱え込まないように寄り添うこと、一つ一つの言動に向き合い、心の成長や自立を促すことを一番大事にし、Mが少しづつ自立する力・心を身につけていくことがとても大事な観点である。

インターン活動でみた受験生

清水 真飛（大学生：日本人）

1. インターンとして活動して

すたんどばいみーの教室は子どもたちにとっての居場所である。学校や社会は外国人がマイノリティーの空間であるが、すたんどばいみーでは日本人がマイノリティーの空間である。後者のような空間があることで外国人同士が日本に住む外国人の問題や、悩み、状況を知ることができ、助け合える場となっている。教室では勉強と同じくらい子どもたちとの会話を大切にしている。なぜなら、会話することで子どもたちが何につまずいているのか、何に悩んでいるのかを知ることができるからである。そして、同じような問題に直面してきた外国人スタッフが外国人の子どもの問題を解決に導く、当事者が当事者を救う構図があるのが、すたんどばいみーである。そんな中、日本人である私ができることには何があるのだろうか、必要性はあるのかとよく考えことがある。すたんどばいみーに入る前は自分が日本人だということを意識したことがない。すたんどばいみーに入ったことで日本人ということを意識するようになった。それは、外国人と自分を対比して見たからだと考えられる。世界のあらゆる分野の事象は比較されることによって関係性が認知される。比較することは関係性を理解するには最も適していると私は考える。つまり、外国人と日本人という関係を理解するには対比が必要である。上記のように学校や社会とは逆の空間の中でも日本人がいることで対比ができる、外国人のアイデンティティ形成につながると考えている。アイデンティティの基盤がしっかりとすれば、すたんどばいみー、学校、社会とだんだん規模が大きくなってしまってもアイデンティティを確立できるのではないかと考える。

日本人の私が上記の理由以外にすたんどばいみーで活動を続ける理由として挙げられるのが外国人問題を知ることである。同じ日本に住んでいるにもかかわらず平等に扱われないことや、親と言語の問題でうまく会話できないなど多くの困難があることをすたんどばいみーで活動するようになって知ることができた。外国人の子どもたちが抱える問題を日本人に知つもらうのが私の今の課題である。この課題をクリアするためにも当事者団体に所属する日本人の役割を今以上に模索していきたいと考えている。

2. 活動に関わって得た気づき

私はこの1年間、中学生教室に通う中学3年生を見てきた。教室にはカンボジア人の男子Kと日本人の男子I、ベトナム人の女子Yの3名が参加している。彼らが中学3年生ということもあり、主に受験に向けての情報提供や学習補助を行った。

i. カンボジア人男子 K

カンボジア人男子のKにとって、受験への壁となったのが携帯依存症である。Kは、友達とつながるツールとして携帯を利用する。直接話すのとは違い、SNSなどでは理想の自分を装うことができるのか、携帯を手放すことができない。Kは、中学生教室に来てもまず携帯をいじり始め、なかなか勉強に入ることができない。勉強に手を付けても、SNSの返信をすぐに返さなくてはならないという思いが強く学習に身が入らず、5分後には携帯の画面を見てしまう状況だった。その対応として考えたのが、学習する時間と休憩をうまく区切ることである。休憩時間を以前より5分多く設定した。この方法を採用した当初はうまくいかなかったが、続けていくうちにKにも浸透し効果が見られた。

また、携帯でのインターネットの使用方法にも問題が見られた。例えば、インターネットで出会った中学生と付き合うといったことである。ある時、何県の中学生かは教えてもらうことができなかつたが、彼女ができたといっていた。その子のことは、顔しか知らず会ったこともないとのことだったが、その後間もなく別れている。Kにはインターネットの危険性を話したがあまり心に響いている様子はなかつた。高校生になり、活動範囲が広がる上でも大切になってくるので注意は促し続けていきたいと考えている。

Kは、夏休みが終わったころから学校を休むようになった。その理由を他の学習者に聞くと元カノと隣の席になったため行きたくないとのことだった。この期間は、週に2回しか学校に行っていなかつた。一方で上記のSNSで出会った彼女と同様にSNSで出会った友達も多くいる。その友達も不登校であり、携帯で会話しているのだと考えられる（彼のSNSから予測）。席替えで席が変わつても学校に行く回数に変化はなかつたため、後者の予測が上がってきた。11月に彼は学校に行くのは暇つぶしであるといっていた。この考えが高校まで続くとまた学校に行けなくなる危険性がある。それ以降、何のために学校に行くのかを考えるよう促してきた。成績のためというのが一番受験生の心に響く言葉だと考えられるが、Kには響かない。その理由として、夏前の成績で空白（成績がつけられない）の教科があったことで内申書を必要としない高校に志望校が絞られたからである。内申書を必要としないことで、中学校に行く意味を見出すことができないのだと考えられる。Kは、部活にも所属していたが活動には参加していない。この中途半端な行動のために、友達と楽しむよりも部員への気まずさが勝っている状態である。以上のことから私は、受験終了後も学習支援もしつつ、学校に行く目的を共に考えていきたいと考えている。私が考えるKが学校に行く目的とは、学習のためよりも友達との対人関係を形成することにある。対人関係を形成する（学校での友達を作る）ことができれば、それが学校に行く目的になる。そして、学習においても切磋琢磨できる関係になればよいと考える。

12月には、一緒に高校見学に行った。Kは、高校見学とはただ単に校舎を見るために行くと考えていたため、説明会で聞くことやメモをとるタイミングなどを教えた。Kには、受験の点数配分や面接で聞かれる内容などをメモしてもらった。説明を聞く中で、受験へのモチベーションを作ることが第一の目的であった。この効果は大きく、教室でも学習に向かう姿勢が変わってきた。また、一緒に行くことで普段の様子や高校に対して持っている印象についても聞くことができた。これで、高校受験へ照準をあわせられたと考えていた。

しかし、受験まで残り少ない12月に不安要素が発生した。Kが勉強合宿に参加しなかつたのである。理由は、勉強合宿の日程がクリスマスと重なっており彼女とデートしたいとのことであった。受験へと気持ちが向いていると考えていたため、私の考えは甘かったと思ったが、Kにとって優先順位を考える機会になればいいと考えている。

1年間Kと関わる中で、Kは受験が近づくにつれて携帯への意識が薄らいでいる様子が見られた。携帯依存症の克服には何かに熱中するまたは、やるべきことを見つける必要があるのだと考えられる。

ii. ベトナム人女子 Y

ベトナム人女子のYは、大人に頼るのがうまい子どもである。普段は中学生教室のほかに小学生教室のスタッフとして活動しているため接する機会が多くある。小学生教室に参加しているときのYは、他のスタッフと変わらず堂々としており、子どもへの対応もしっかりしている。Yは、活動していく中で褒められることやスタッフとして活動することで特別扱いしてもらうことを求めている。現在共に活動するスタッフや、Yがすたんどばいみーの小学生教室に参加していたときに関わったスタッフの行動を参考にして、子どもと関わっているのだと考えられる。自身の受験が近づいていくにつれて不安が募り子どもへのあたりが強くなつたため、このことに関しては適宜注意した。

中学生教室では、小学生教室のときのスタッフとしての態度とは違い、中学生らしさを見せる。学習を教えてくれるスタッフにきつく当たるなど、スタッフを攻撃対象とする。また、中学生教室にしか参加していないスタッフに対してこのような態度をとることが多い。小学生教室で共に活動しているスタッフに対しては、仲間意識から強い発言をすることが少ない。ここには自分が中学生であることを示すYの思いがあるのだと私は考えており、特に問題意識はない。スタッフといつても中学生に戻れる空間が必要であると考える。

Yとは9月、10月に成績に見合つた高校を2校見学しに行った。高校選びはYが学校の先生と相談して決めた。私は、高校を選択する際には各高校が重視していることを見るようにアドバイスした。Yが選んだのは専門性がある高校と普通科の高校である。最初Yは、将来の夢も決まっていなかつたため普通科の高校を目指すことに決めた。しかし、その1ヵ月後に先生のアドバイスで志望校を変え、さらにその1ヵ月後、親の言葉により志望校を変更したが、最終的には先生に言われた高校を志望校とすることになった。ここから、Yは自分の意見ではなく他人の意見に左右される傾向が見られた。志望校を頻繁に変える理由は、周りの目を気にして自分に自信が持てないからだと考える。周りの意見に従えば、気は楽になるかもしれない。しかし、自分の人生を他人の意見に左右されてよいのかと私は考える。今後、人生で決断を迫られるときは多くある。私はYがそういった場面に出くわしたときでも自分の意見に自信がもてるよう言葉掛けをしたが、Yはあたかも最初から志望校は変わっていないかのように振る舞い、効果は見られなかった。しかし、今後も声かけは続けていこうと考えている。

Yは、受験が近づくにつれて不安定になり、この1年間でしか見られない表情を多く見せた。しかし、勉強合宿に参加するなど受験に照準があつてるのでこのことに関しては不安要素がない。

したがって、対人関係について学べればよいと考えている。

iii. 日本人男子 I

すたんとばいみーが日本人である I を受け入れている理由にカンボジア人 K の教室への参加率を上げるという理由がある。I と K は一緒に来ることが多く教室への参加が定着した。

日本人男子 I に関しては、日本人ということもあり進学情報は周りから得ることができる。高校見学も友達と計画し行くなど受験への照準もあって。I は、K とも仲が良く I が通っている塾に K を誘うなど K を心配している部分が見られる。しかし、12月頃から K がやる気を示さないため学習に関してはあきれている様子が見られた。I は親を頼りに受験を乗り越えられるだろう。

iv. 3人の関係

3人の関係は中学生教室だけにとどまらず、普段教室がない日でも何人かほかのメンバーを加え遊んでいるようだ。しかし、最近はその回数が減っている。教室の様子を見ていても I と K が2人の空間を作ってしまい、Y が入れない様子が見られる。

I と K の関係には多くの懸念が浮かぶ。K が遊ぶ相手には必ず I が含まれており、I にくつついで行動している。I には友達が多くおり、K は I を通じてほかのメンバーとつながっていると推測する。ここで気がかりなのは、I が他の友人と遊ぶことに熱中し K を見捨てた時に、K は誰ともつながりを持てないということだ。こうなってしまうと、K は学校に行くことはおろか、社会にでることも拒否してしまうのではないかと考えられる。こういったことを回避するためにも K には対人関係を学んでほしいと考えている。

また、3人がすたんとばいみーでつながることができたことを大切にし、今後も関係を続けてもらいたい。

v. 活動を通して

今年度は、主に外国人の子どもを対象に受験に向けての支援を行った。それを通して子どもたちの意識の変化を実感することができた。外国人の子どもたちは学校からしか受験情報を得ることができない。面接シートの書き方や、文章構成の仕方など難しい部分が多くあると実感した。外国人の子どもにとってすたんとばいみーは重要なものとなっている。

3. 今後子どもたちにとって必要なこと

受験が終わったとしても学習は続け、なおかつ高校に入った後どうしたいか、など目的意識を持つてもらう必要がある。

中学生教室では、ある程度スタッフは固定してもいいが毎回同じスタッフではないほうがよいと考える。そうすることでスタッフが皆、子どもの現状がわかり多くの対策を考えられ、子どもたちにも良い影響を与えられると思うからだ。また、メリハリをつけることも必要だ。学年ごとに

タイムスケジュールを組むことで子どもたちの学習に対する意識も変わってくると考える。

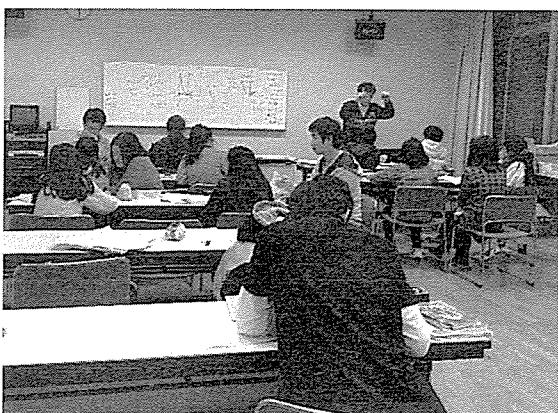
私は、教育情報を得られる家庭で育ったが、外国人の子どもたちは受験情報不足という問題があることを知った。ということは、他にも受験情報がなく高校をあきらめたりしている外国人の子どもたちがいると考えられる。今後、すたんどばいみーが知名度をあげ、子どもたちが集まってくれればよいと考える。それに伴い、ボランティアの人が多くなり日本人に外国人の現状を知っていつてもらいたいと考える。



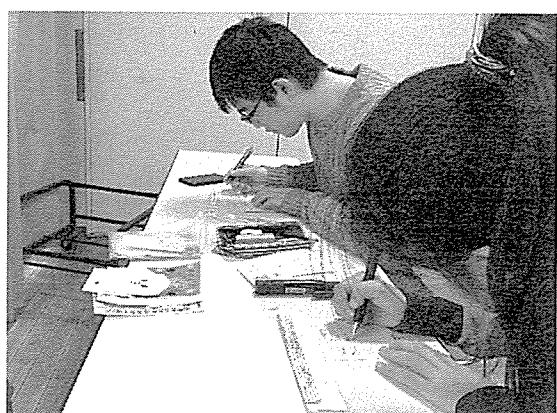
(中学生教室の様子)



(ばいみーキャンプの様子)



(勉強合宿の様子)



日本語教室の始まりと展開

劉 麗 凤（大学院生：中国残留邦人）

1. 新しいニーズと活動の始まり

日本語教室は2016年から始まった新しい学習教室である。すたんじばいみーにとって、これまで外国人の子どもを対象とした学習教室を開催してきたが、外国人の大人を対象とした教室は初めての試みだった。現在教室に参加している人は、ベトナム、中国、カンボジア、ペルーなどの出身者であり、大抵の人が平日働いている。参加者の来日年数も10数年から1、2年などとバラツキがあり、日本語の習得度合いに幅が見られる。例えば、日常会話を聞くことができるが、自分の考えや意志を伝えることが難しかったり、挨拶程度の日本語の発音も難しい人もいる。その一方では新聞を読む練習や、介護の資格を取るための勉強をする人もいる。そのため、教室では参加者の日本語レベルに合わせて、入門、初級、中級の3クラスで学習を行ってきた。

日本語教室の開催は、日本で働く外国人の大人の労働状況について知ることも目的としてあった。今の日本において、技能実習生という名目の上で来日し、過酷な労働状況で働く外国人が多くいる。

「人身売買」とも言われている技能実習生の労働状況は、日本の労働制度について詳しく知らない外国人の大人と似通ったところがある。そのため、現在の外国人の労働状況を知ることは大事なことである。

2. 活動から見えてきたこと

日本語教室を開催して約一年が過ぎたが、講師として参加してみて以下のことを考えた。

i. 「必要な日本語」とは

まず、「何を教えるのか」ということについてである。私自身、16歳の時に日本語がまったく分からぬ状態で来日し、来日後の約1年間は、ボランティアの先生に日本語を教わった経験がある。その後、日本でアルバイトや学校生活を送っていく中で、教わった日本語と、日常生活で使う日本語の間にかなりの差があったことを感じた。というのは、当時、まだ中学生だった私が、「です」「ます」調で教わった日本語は、教師一生徒、上司一部下など、フォーマルな関係において使用する言葉だったことに対し、学校生活、あるいは友達関係においては、それらのフォーマルな言葉を使用する場面が限定されていたからである。そのため、同年代あるいは親密圏内の会話を理解し、そして自分のことを話すに至るまで、かなりの時間を要した。この経験を踏まえ、日本語教室に参加したとき、「必要な日本語とは何か?」という問い合わせを頭に置きながら行った。この点は、教室に参加しているほかのスタッフにもある程度共通していた。今年初めて開催した教室であるため、学習に使う教科書のどの部分を、限られた時間内で学習するのかについては、模索しながら行った。その時に重要なのが、やはり「生活に密着した日本語の学習」である。特に、漢字圏ではない学習者が多いなか、日本語や漢字を書くことは困難を伴う。そのため、書くことよりも読むこ

と、読むことよりも話すことに重点を置いて教えた。学習者は文章を繰り返して読むことで発音の練習をしたり、学習者の日常生活での出来事を事例に、言葉を覚えた。例えば、「受付」という言葉は、病院に行っても区役所に行ってもしばしば使う言葉だが、その言葉を知らない人が多くいる。学習者が病院に行ったときの話を聞きながら、絵などを使って、「受付」を書いて見せたりすることで、言葉の習得を目指した。

ii. コミュニティとしての機能

次に、「コミュニティとしての機能」についてである。日本語教室の参加者のうち、元々地域の知り合いで日本語教室に参加する者もいるが、普段の生活の中であまり関わりを持たない人々がともに学ぶ場として、日本語教室が機能する側面もあった。例えば、普段はとても限られた生活圏の中でしか生きておらず、そのため、来日年数が長くても日本語を話すことを困難にしている学習者もいる。そのため、日本語教室に来れば、日本語でやりとりする場面が増えて、ほかの人と関わる場にもなる。また、同じ出身国の学習者は、日本語教室に参加することにより、お互いを知ることもできる。一方では教える側が、地域で生まれ育った外国人の青年たちということもあり、日本語教室に参加する学習者は毎回10～15人前後と定着していて、スタッフの人員が不足するほど、参加者が多くなった。教える側の多くは、同じ外国人であり、母語での会話が可能という点で、学習以外の相談を引き受けられる場としても機能していたからであると考えた。母語が話せるスタッフが、学習者に説明をしたり、学習者の考えを通訳したりすることによって、学習者が安心して教室に来ることができていると考える。

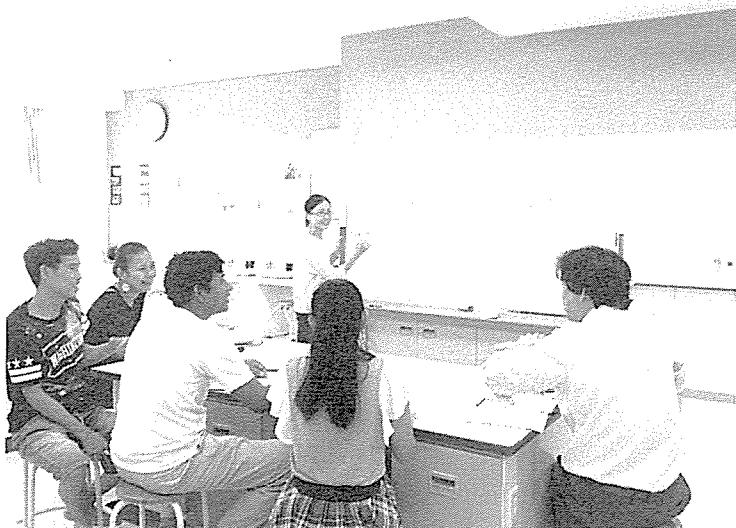
3. 活動の今後の展望

日本語教室の開催によって、これまでの子どもを対象とした活動とは違い、日本で働く外国人の大人のニーズや労働状況について知ることができた。そして何よりも、日本での在住年数に関わらず、日本語の習得が困難であるという現状を目の当たりにした。今後、日本語教室の活動の展望について、以下の点が挙げられる。

第1に、日本語教室の参加者の労働状況の問題についてさらに話してもらい、知るべきである。これによって、自分自身のことを話す練習になると同時に、現在の労働状況についても触れることができる。日本人の労働者と違い、学習者には労働者としての権利という概念は、あまり持っていないため、何か納得できないことがあっても、直接伝えることができなかつたり、労働者として主張することができないことが予想できる。そこで、教室の中では、「労働」や「仕事」をテーマに、日本語の学習や、日本の労働制度について学習することが必要ではないかと思う。この点については当初、教室開催の目的として挙げたが、活動において十分にその様子を把握できなかつたため、今後の活動の課題である。

第2に、日本社会の仕組み（学校、病院、区役所、保険など）について理解し、学習を進めいくことである。日本に長く住んでいても、日本社会の仕組みについてほとんど知らないというのは、筆者の親世代も共通する部分である。そのため、言葉ができない、という理由で、子どもが通訳に

駆り出されたりすることもよくある。しかし、言葉の問題だけでなく、そもそも日本社会の仕組みについて知らず、知る機会がないという課題があるようだ。筆者の経験上では、地域の日本語教室でも学習内容が日本語のみに留まっていて、日本社会で生きていくために必要な知識を教えてくれる場所はあまりないようだ。そのため、教室の中でも、そういった制度に関する学習も必要だと思う。特に、すたんどばいみーの活動に参加している子どもたちの様子を見ても、親たちが日本社会で生きていくための知識を持たないことによって、子どもたちも知識の獲得が困難になっている。そのため、親世代の知識獲得が重要であると考える。



(日本語教室の様子)



(餅つき大会の様子)

母語を生かした活動

宮脇 英理（大学院生：日中系ベトナム）

1. 母語教室での活動

ベトナム語教室には、ベトナム人の子どもが12人、インドネシア人の子どもが1人の小学生と高校生が参加している。ベトナム人の子どもたちは、親からの「母語を学んでほしい」、「同じルーツをもつ子ども同士で関わってほしい」との願いのもと教室に送り出されている。他方、インドネシア人の子どもは、「学校にベトナム人のお友達がいるから、話せるようになりたい」と、2016年度から教室に参加し始めた。

しかし日本で生まれ育っている子どもは、母語を学ぶことに重要性が見いだせず、難易度が上がっていく学校の授業に追いつくことや友達との人間関係が重要になる高学年になるにつれて、徐々に教室から疎遠になっていく。私も学習者としてベトナム語教室に参加をしているときは、母語を学ぶことが楽しくなく、苦痛であったが、強制的に親に送り出されるため参加をするしかなかったという思い出がある。

そのような自身の経験からも、教室では“楽しく学びながら母語や文化に触れてほしい”と思い、子どもたちが日常生活で使うような単語や話し言葉を読み書きし、語彙を増やすことを行っている。それと同時に、様々なイベントを行った。

日本で生まれ育った子どもたちは、親にベトナムに連れて行かれたとしても、ベトナムという国をよく知っているわけでも、文化をよく知っているわけでもない。そのため学習教材は、ベトナムの話や実際の写真を用いるなど、私自身が子どもの頃にしてもらいたかったことを取り入れて作成した。子どもたちからは、「日本と違うね」「知らないかったー」という言葉をよく聞いた。また、イベントでは、母語のみで話すパーティーをしたり、旧正月を祝う会を行った。運営する中で子どもたちに母語を用いることや、保護者に母語で依頼の手紙を書き、料理を持参するなどの課題を与えた。それを通じて、子どもと保護者との関わりを作り、保護者の協力を促すことが出来た。

これらの取り組みを通じて、子どもの参加人数は年度初めから増え、保護者の理解を得ることができた。課題としては、教室の運営者も子どもと同様に日本で生まれ育っており、ベトナムの文化や習慣を熟知しているわけではないことが挙げられる。そのため、子どもたちの保護者を巻き込んで運営者では成し得ないベトナムに関する話や、昔話、踊りなどの支援を行いたい。

2. 通訳を通した学校への入り込みの活動

近年、親の出稼ぎや呼び寄せによって、来日まもない子どもの数が増え、近隣の小学校では年に2～3名の子どもが来日し、学校に入学している。そのことを受けて学校から通訳の依頼があり、学校へ週1回入り込みをする活動を行っている。今まで來日間もない子どもがいたとしても、全く日本語ができない子はいなかつたため、学校側は対応に困っていた。

今までたんじぱいみーでは、日本で生まれ育った子どもたちに、日本語で学習補充をする活動

を行ってきた。一方で通訳を行う学校への入り込みでは、来日間もない子どもに母語を通じて、①場（状況）の説明、②授業内容の通訳、③友達や先生との意思疎通などをしなければならない。子どもの隣の席に座り、上記の①～③を通訳者（私）の判断で、取捨選択して通訳を行うのである。そのことから推測すると、来日間もない子どもが訳も分からぬ状況の中で、どのようにその場の状況を把握し、人間関係を構築できる基盤を作れるかは、通訳者の力量による。そのため、子どもの目線に立って、通訳を行うことに細心の注意を払った。また入り込みが終わる時には、必ず担任に子どもの様子や気になったこと、改善してほしいことを話すようにした。

私が通訳を行ったのは、子どもの来日順に5年生のH、3年生のG、4年生のCの3名である。学校の入り込みを通して、以下の3点のこと気に気づき、通訳の重要性を感じた。

1点目に、言葉が通じる相手がいて周りの人と意思疎通ができることは、子どもにとって安心材料になるということである。私が通訳を行った3名は、学校の中での表情が暗かったように思われる。そこで、私は子どもと関係作りをするために自己紹介から始め、子どもの家族関係、来日経緯、趣味などを聞いていった。そして子どもと会うときは必ず、一週間の出来事や楽しかったこと、よくなかったことを訊ねるようにした。すると、日を追うごとに、子どもから話してくれるようになり、「次はいつ来くるの？」と聞かれるようになった。通訳として入り込みをした当初の子どもの変化を見て、小学校の国際教室の先生も「子どもの表情が、通訳がいるかいないかで全く違う。また、通訳者が歳の近いお姉さんであるということもある。Gは、来たばかりのときは顔がこわばっていて、のっぺらぼうのようだった。でも、通訳者に会ってから、抱きついたり帰ったりしないでと言っていて、驚いた。子どもの違う一面が見られて、特徴が分かった。」と語っていた。

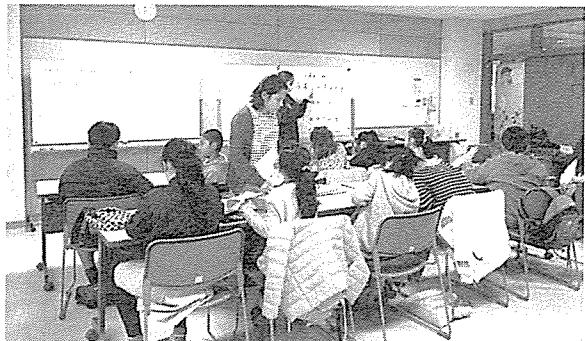
通訳者は、来日間もない子どもへの直接的な支援の他に、その子に話しかけたいがコミュニケーションがとれない周りの子どもへの通訳も行った。子どもたちは、「なにが好きなの？」「なに笑っているの？」「〇〇って聞いてみて」というように言葉の壁があつて話せなかつたことを、通訳者を介して意思疎通を図り、人間関係の構築を成すのである。

2点目の気づきは、学校の先生に対して来日間もない子どもや外国につながる子どもへの理解を促す必要があるということである。国際教室の先生が語るには、「事前に通訳者が来るのを子どもや担任に伝えることで、子どもは通訳者を楽しみに待ち、担任は通訳してもらいたいことを準備したりしている」ということであった。子ども同士が意思疎通できていないように、先生たちも子どもと話ができるていないのである。そのため、通訳者は先生と話す時間を必ず設け、先生が困っていることを聞いて子どもの様子を報告する他に、アドバイスも行った。また、他の外国につながる子どもの様子も伝え、先生に目を向けてもらうようにした。そのことによって、先生がクラスにベトナム語の辞書を置くようになったり、外国につながる子どもの様子を国際教室の先生と共有するようになった。

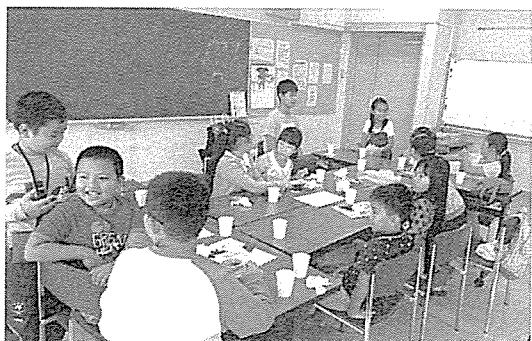
3点目に、現状として通訳の人手が不足しているということである。正規の通訳者は、市の教育委員会から期限と予算制限付きで依頼されており、その他は大和市国際化協会やすたんどばいみーの学生運営委員がボランティアとして行っているのである。このことについて国際教室の先生は、「市の教育委員会から派遣される通訳者は、週1回で3ヶ月間しか来られないため、ボランティア

として来てもらっているだけで助かる。」と語っており、通訳者の依頼をしたいが、依頼ができる予算が限られていることからボランティアに頼らざるを得ないことが現状としてあるようだ。

今後も来日まもない子どもが増えると推察されている中で、通訳の支援を続けていくには、人材と資金の確保が必須であると考える。



(母語教室の様子)



(イベントの様子)

**神戸地域における外国人の子ども・青少年
エンパワメント事業報告**

ジュニアコーディネーターの活動を通して

高橋 愛満（社会人：日本）

1. 事業のための研修の成果および課題（神戸）

神戸研修① ベトナムにルーツをもつ子どもたちの進学と就労調査より（講師：山本晃輔氏）

【日程・場所】 2016年8月11日（KFC）

【参加人数】 12人

【目的】

KFCの拠点である神戸市長田区の地域性を含めた視点から、ベトナムにルーツをもつ子どもたちの進学と就労調査による学力達成・地位達成をみて彼らが日本でどのように社会と結びついているかを知ることで、学習支援に来ている子どもたちの状況を理解すること。

【研修の概要】

日本で社会参加をするためには、高校進学が一つの基準となるが、兵庫県のベトナムにルーツを持つ子どもの高校進学率は日本人の子どもと比較して、著しく低い。長田区は生活面で状況が厳しい人が多い土地柄であるため、長田区に住む子どもたちは学校でも自分だけがしんどい思いをしているわけではないと感じている。また、家庭（ベトナム社会）と日本社会を切り離せるものとして考え、家族との確執や葛藤を語る子どもも少ない。

このような長田特有の、ある種の居心地の良さの裏側には、様々な問題が詰まっている。一つは、周囲の子どもたちと外国にルーツのある子どもたちの間に学力の差があまりなく、その低さが顕著化しないことで、勉強への意欲が過熱されないこと。二つ目は学校における文化的障壁の低さから、意識することなく周りに同調的になること。最後に、家族と乖離していく中で、将来の展望を形成するためのきっかけや情報の取得手段が学校というメインパスのみに依存した形で形成されていくことである。

高校へは親や先生の期待もあり、漠然と進学を決意する子が多いのに対し、高校卒業後の進路選択は、手に職をつける専門学校などへの道を選択する子、進路指導や周囲の動向に影響を受けて就職する子が多い。子どもたちは自らが望みえないガラスの天井があると感じており、大学に行くような無駄な回り道を回避して、すぐに仕事を見つけて自活できるだけの給料をもらうという、選べる範囲で最大の安定を求めて生きている。

【成果・課題】

成果としては、KFCの活動拠点である神戸市長田区の地域性を踏まえた内容だったため、日ごろから神戸の学習支援で関わる子どもの家庭環境や学校・地域の風土を知ることができたことである。課題としては、講演にもあった通り、KFCに来る



子どもたちも高校進学率は非常に高い数字であるものの、大学進学に対しては躊躇する子どもが多いことである。そこには大学に進学したその先の将来が想像しづらく、現時点で見えている選択肢に絞って決めている姿がみられる。高校生の早いうちから、大学に行った先の社会を知る機会が必要である。

神戸研修② 偏見と差別について（講師：野崎志帆氏）

【日程・場所】 2016年10月8日（ピフレホール）

【参加人数】 13人

【目的】

学習に来る子どもたちから、差別的な発言やいじめられている等の人権に関わる問題を見聞きすることがある。そういう場面に遭遇した時に支援者として対処するべき方法を、映画「ズートピア」を通して考える。

【研修の概要】

日常生活の中で人は、自分が理解しやすいように物事をカテゴリー化しながら考えている。その過程で充分な事実確認を怠って物事を納得することで、不安を解消しようとすると「偏見」に繋がりかねない。また、人間は「自分は価値ある存在である」と思いたい生き物だが、特に自分に対して不安を抱えているときには、差別によって他者の価値を奪い、「自分より劣った」存在を作ることで自分の価値を保とうとすることがある。

そして、目の前の見えることのみで判断を下すのではなく、物事の背景まで想像してみることは重要である。私たちはメディアから多くの影響を受けているが、その情報が必ずしも公平な視点から発せられたものとは限らない。だからこそ、その影響を自覚し、自分も間違いを犯す可能性があることを認め、自己の中の偏見に対抗する必要がある。

【成果・課題】

成果としては、偏見や差別についての専門的な知識を、映画やスライドを通して解釈できたことで、子どもの支援に関わる支援者が共通の認識を持てたことである。課題としては、次は子どもに対しても同様に理解しやすいツールを用いながら差別や偏見について理解し、お互いを尊重できるよう、人権教育の機会を設けていくことである。



神戸研修③ 在日ベトナム人の背景と現状（講師：福山恵（旧姓 Ha Thi Thanh Nga 氏）

【日程・場所】 2016年10月21日（KFC）

【参加人数】 7人

【目的】

在日ベトナム人の背景と現状を理解することで、エンパワメント事業で関わる子どもたちのルーツをたどり、支援に役立てる。

【研修の概要】

Nga 氏は亡命に際し、最小限の荷物のみを持って船に乗った。船には3日分の食料しか積んでいなかった。Nga 氏は3日目に日本行きの船に拾われたが、43日間海を漂い、ほんのわずかしか生存者がいなかつた船もある。日本は1975年から78年まで難民の受け入れをしておらず、難民収容施設ができたのは1982年である。施設に入って日本語教育と生活ガイダンスを受けるが、3カ月で就職あっせんされた後は自力で生活しなければならなかつた。

ベトナムと日本の文化や言語の違いに対する困難はあるが、特に子育てに関してはより大きな葛藤がある。例えば十分な訓練を受けられず片言の日本語のままで日本の社会に入つても正規の職に就くことができず、アルバイトでは生活の基盤が固まらないために子どもの学費が払えない家庭もある。その他にも、子育てに関する文化的な認識の差異がある。ベトナムでは基本的に親は子どもを褒めず放っておいても大きくなると考えているが、日本でそれは通用しない。日本社会で育つ子どもたちを前にして、甘やかすのか厳しくするのか、家庭で日本語を話すことを許すのか、など自分の家庭に合う方法を模索しながら子育てをしている。

1世は母国に対する思いが強い一方で、子どもたちは自分がベトナム人であることを一步引いたところから見ている。しかし、難民の経験を話すと親のことを見直すこともある。ベトナムのいい面を分かつておらず自信を持っていない親であれば、子どもたちも自分に自信を持っていない。ベトナムを誇れる国だということができれば、「私はベトナム人だ」と胸を張って言える環境になる。

【成果・課題】

成果としては、実際に難民として来日した人の語りを聞き、生活に関する悩みや子育てをする上での葛藤を知ることができたことである。Nga 氏の子ども世代が現在KFCの学習支援教室に通っているため、家庭での親と子のやり取りや親の子どもに対する願いを聞けたことで、より子どものアイデンティティ形成を大切にしながら支援に関わるヒントを得た。



神戸フィールドワーク コリアNGOセンター訪問（講師：金光敏氏）

【日程・場所】 2016年10月22日（コリアNGOセンター）

【参加人数】 7人

【目的】

大阪で20年来、外国にルーツのある子どもの支援を続けてきた当事者団体のNPO運営のノウハウやこれまでの軌跡を知ることで、子ども見守りネットワーク拡大に役立てる。

【研修の概要】

コリアNGOセンターは子どもの教育支援、特に民族教育を大阪で促進する目的で設立し、大阪市に制度を作らせるなどの成果を認めながら活動を広げてきた当事者団体である。当事者であるがゆえに説得力を持つことや、誰かの代弁ができることに自分たちの役割を置いているため、当事者性を担保している。このやり方は閉鎖的に見られ、アピールにも大きな労力を使うが、あえてそうすることに価値を選び活動している。

事業をする上でのひとつの大きな利点は、地元で活動していることである。そのため地域の人たちは地域の店舗の中に入って活動しても何も言わない。長く活動を続ける上で大切なことは地元の人と絶対にけんかをしないこと。社会事業者と生活者は価値観や立ち位置の違いがあるため、様々な対立があるが、耐えるうちに中立に立てるようになる。

NPO経営に関しては、団体設立当初は寄付やカンパに頼っていたが、景気に左右されるうえに、民族意識の高い世代の数が減ったこともあり、2つの収益事業を始めた。ひとつは韓国の物産を仕入れて販売すること。もうひとつはコリアンタウンの体験学習である。大阪の人権教育を行っている高校に対して始めたことがきっかけとなり、現在は修学旅行の学生まで、年間9千から1万人に向けて行っている。団体運営のために資金を得たいという想いがある一方で、徹底的に見世物になることに対する葛藤もある。しかしマイノリティのための資金獲得を思い、割り切って実施している。20年以上継続して同じ現場で活動してきたことによって、多少の無理が利くようになった。つらくても、同じ場所にずっと立ち続けることはとても重要である。その中から評価やネットワーク、信頼が生まれてくる。

【成果・課題】

成果としては、KFCと同じように長期にわたり外国にルーツを持つ子どものために活動を続けてきた当事者団体の話を聞き、活動内容から運営面に至るまで知れたことである。課題としては、今後の活動に今回得たノウハウを反映させて、より子どもに届く支援の質を上げていくことである。



神戸研修④ 外国にルーツを持つ子どもの人口規模と進学率の年次推移—子どもたちの家庭背景と時代背景に着目して—（講師：鍛治致氏）

【日程・場所】

2016年12月8日（KFC）

【目的】参加人数14人

外国にルーツを持つ子どもの人口規模と進学率の年次推移を国籍別に検証し、子どもたちの家庭背景と時代背景を探ることで子ども支援に役立てる。

【研修の概要】

外国にルーツのある人は、どの年代にどのような流れの中で日本に来て出て行ったのかなどを、国籍別に統計で辿ることができる。例えば、政策により1990年ごろから来日した日系ブラジル人の子どもは、3万人にまで達したが、サブプライムの影響を受け、2005年から2015年にかけて42%減少し、景気に左右されている様子が顕著に見て取れる。韓国・朝鮮籍の人口は減少しており、親世代の職業はホワイトカラー化している。母子家庭の世帯数は多いが、進学率の格差は年々解消している。中国籍の人口は増加しており、来日する人はほとんどが大学に進学することを前提にビザを取り入国している。職業はブルーカラー化している。また中国残留孤児ルーツの子どもは3世から日本生まれの4世の時代に入っており、連れ子を呼び寄せる流れがある。進学率の格差は解消されている。ブラジル国籍の人口は経済的要因により減少しており、職業はブルーカラーである。親は低学歴であるが、高校在学率は向上している。定住化が進んでおり、持ち家に住む人がいることから、脱出稼ぎ化の傾向がうかがえる。フィリピン国籍の人口は連れ子を呼び寄せるなども影響し、増加傾向であったが、エンターテイナー向けのビザが廃止になったため、減少していくことが見込まれる。親は低学歴であるが、高校在学率は向上している。母子家庭が多い。

【成果・課題】

成果としては、日本に住む外国につながる子どもや親の数を国籍別にグラフに落とし込むことで、ルーツの国によって経済状況や進学状況が異なることを明確に把握できたことである。課題としては、それらの情報を踏まえた上で、現場で出会う子どもや家庭に対してそれぞれのニーズに合わせて臨機応変に対応することである。

2. 事業のための運営マネジメント補助の成果および課題

運営の補助として、助成金管理ファイルの作成を行った。NPOの運営に携わること自体初めての経験だったため、事業費の予算の組み方や支出の記録の仕方を習得できたことで、費用面から事業の全体像を見ることができた。課題としては、その他の運営マネジメント補助を担うことができなかつたため、今後も取り組むべきことが多く残されていることである。

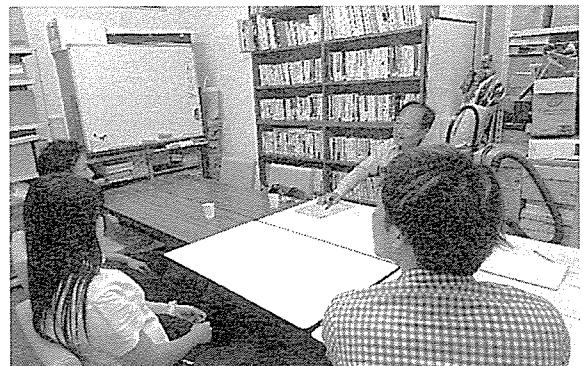
3. 事業のための現場コーディネート補助の成果および課題

① 外国人子ども支援インターの育成

本事業を行うにあたり、神戸では5名のインターンを採用し、学習支援や子ども食堂の運営を中心に行なってもらつた。5名の内訳は1名が日系ブラジル人、1名が中国にルーツがある者、その他3名が日本人である。そのうち1名が1月から事情により参加できなくなつたが、後の4名は10ヶ月にわたり活動に参加した。本事業への補助を受けて、学習支援および新規事業であった子ども食堂を円滑に実施する人員を得ることができた。学習支援事業では子どもたちの学びの場を創出することに加え、地元の中学校の先生の協力を得て設けた、中学3年生の学習者への進路相談に参加するなど、外国にルーツを持つ子どもたちの抱える困難に共に踏み込んで考えることができた。子ども食堂事業ではイベントの企画、運営に加えて、様々な国のルーツを持つ子どもたちが言語や文化の違いを超えて関係を築いていけるよう、橋渡しをする役割をインターンが担つた。子どもと共に食事をとり遊ぶ体験を通して、インターンが率先してどのルーツを持つ子どもたちとも信頼関係を築き、子ども同士がお互いを思いやりひとつの場を共有するためのロールモデルになった。



(学習支援教室の様子)



(中学3年生対象に実施した進路相談会の様子)

② 外国人子ども支援の充実

学習支援事業におけるインターンの学生やボランティアとコミュニケーションを図り、子どもたちの近況や支援者が学習支援を通して気づいたことを共有してもらうことで、子どもがより成長できる支援者とのマッチングや教材提案を、長期を見据えて行うことができた。子ども食堂事業では、参加する子どもたちが第2の家と感じられるアットホームな空間作りを行つた。その結果、最初は同じ国のルーツの子ども同士で集まりがちだったが、今では誰とでも仲良く遊び、意見も相手にしっかりと口で伝えられるようになった。提供する料理は、食育の意味も込めて季節や行事に合わせたものを作ったり、様々な国の料理を、時にはその国にルーツがある人を指導に招きながら子どもたちとともに作つた。回を重ねるごとに、子ども自身が次の食事のメニューを提案したりみんなができる遊びの呼びかけを行うようになったことからは、一人ひとりが安心と居場所を感じシチズンシップも育んでいることが伺える。今後の課題の一つとして、コミュニティ形成と既に築かれた人間関係をどのように発展させていくかを考えていきたい。本来子ども食堂は食に困窮する低所得者に向けた事業であるが、現時点で呼びかけてはいるもののその層からの参加は少ない。文化やルーツを超えて場を共有できるようになった子どもたちは、他の困難を抱えている子どもたちに働きかけて居場所の輪を広げていく能力が多分にあると考えており、その場や機会を作つていけること

が望ましい。また現在中学生の参加者が少ないが、その年代が関わってくれることで、新たなコミュニティの形が見えるのではないだろうか。

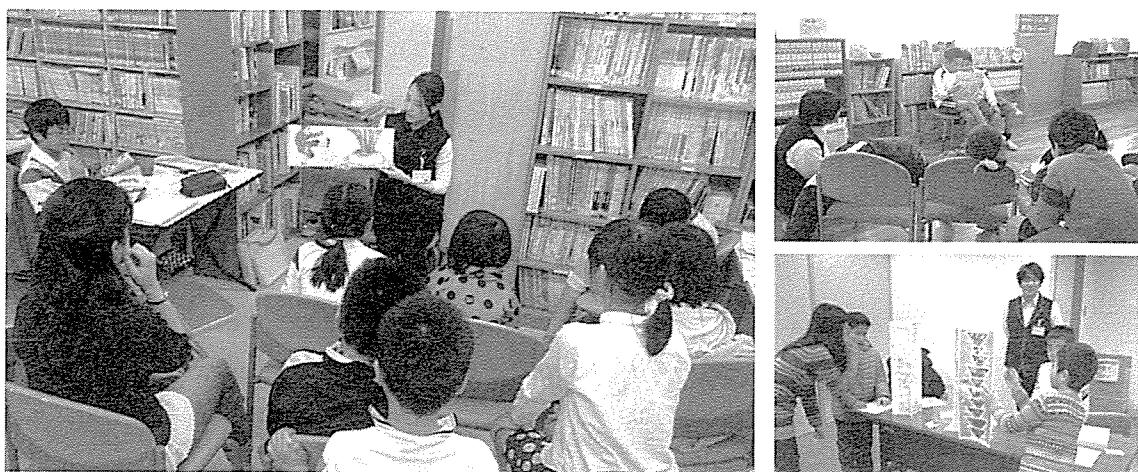
さらに、子どもの成長には信頼関係を築いた大人が長期で関わって初めて達成されるものがあるので、そのための人材確保と資金調達も必要である。

(子ども食堂でのベトナム生春巻作りの様子)

③ 外国人子ども見守りネットワークの拡大

研修会では、支援者の参加によって支援する側が差別や偏見に対する知識を得たり、他団体の運営方法や支援活動を知ることができ、継続して支援を充実させていくための繋がりが作れたとともに、子どもたちの置かれた環境をより理解し関わっていくモチベーションを得ることができた。

また、中学3年生を対象にした進路相談会では、現役の中学校の教員をお招きしてインターンによる通訳を介しながら実施することで、来日年数の浅い子どもや保護者にも日本の高校受験システムを理解してもらい、本人の関心と各高校の特徴を照らし合わせて高校選択を促すことができた。その結果保護者からは、言葉の壁によって得られなかった情報を詳細に知れたことで不安が解消されたとの声があった。加えて、進学する意思のなかった子どもがこの面談によって高校に関心を持ち、4月から進学する決意をしたことも大きな成果である。今後も、さらに子どもや保護者を巻き込んで連携して支援に取り組みたい。



(読書活動の様子)

4. ジュニアコーディネーターの成果及び課題

1年間ジュニアコーディネーターとして、学習支援や子ども食堂など直接子どもと関わる活動の他に、KFCが事務局を務める高校生奨学金事業の資金集めのためのイベント出店を手伝ったり助成金の支出の記録を担うなど、NPOを運営するための仕事にも携わった。一つの事業を成果が出せる形にするために、本当に様々な機関や人の協力があることを、設立20周年を迎えたKFCの蓄積された経験と紡がれてきたネットワークを通して学んだ。

KFCでは週に3回（火・水・木）学習支援を行っている。子どもの状況に合わせて日本語学習や教科学習をする。支援者は大学生や社会人、シニアなど幅広い年代の人がインターンやボランティアとして関わっている。私が関わり始めた頃、来日したばかりで自分の気持ちを日本語では伝えられず、周りの子にちよつかいをかけることで感情表現している子がいた。その子が今では言葉を得て、周りの子たちと楽しそうに話をしている。そして継続して支援者と関わり信頼関係を築くことで、次第に落ち着いて学習にも取り組み、時には学習時間を延長して好きな科目を取り組むようになった。もし私が短期間しかその子に関わっていなかつたならば、行動の背景にある感情や本来の姿を見ることなく「落ち着きのない子」と判断していたかもしれない。また、彼の周りに向き合う人がいない環境に彼がいたならば、私が見た変化は存在しなかつたかもしれない。彼の変化は、KFCが取り組んでいることの本質を私に体現してくれたという点で、非常に印象に残っている。

神奈川のすたんどうばいみーの学習支援事業に参加することで、KFCの学習支援の場を客観的に見ることができた。特に印象に残ったことは、小学生教室に通う子どもたちがスタッフと堂々母語を話していたことだった。KFCでは、来日年数の浅い子どもは母語が話せる支援者と日本語や教科学習をする環境が整っている一方で、日本生まれの子どもが母語を話す姿を目にする機会は少なく、母語を使うことに対して自信がなさそうな顔を見せる子もいる。私は彼らの母語を話すことができないのだが、もし堂々と母語を話し社会で活躍しているロールモデルが近くにいれば、彼らの自信に繋がるのかもしれない。実際、神戸研修の一環としてすたんどうばいみーの学生が学習支援に参加した時に、その学生と同じルーツを持つKFCの子どもたちが母語と日本語をまぜこぜにしてとても楽しそうに会話している場面を見かけた。同じルーツや経験を共有できる少し年上の大人と関わることができ、さらに神戸地域以外にも仲間がいるという輪の広がりを実感できたことは、子どもたちにとって非常に貴重な経験だったと思う。今後もこのような機会を積極的に取り入れることで、子どもが自分の将来についてより具体的に考えやすくなり、結果的に彼らのエンパワメントに繋がるのではないだろうか。

今年から毎週金曜日に始めた子ども食堂事業では、ルーツのある国や文化を超えてひとつの空間を共有するコミュニティとなってきた。ともに夕食を食べ、遊ぶ時間が子どもたちの間に絆を生み、互いを思いやる関係性を築いている。私はこの事業の中で調理とイベント企画を担った。調理に関してはできる範囲で栄養バランスや色合いがよく、季節や国内外の行事に合わせた献立作りを心がけた。また、子どもたちにはただ皮をむいたり最後の盛り付けを任せるだけでなく、何か一つでも

料理についてのアイデアやひと工夫を持って帰ってもらえるように、使えるものを最大限に活用しながら作業を割り振った。役割を担ってもらうことで、子どもがみんなのためにやり遂げる責任感や新しいことを習得する達成感を経験できる場となった。食事前には献立に関連させた料理や行事の歴史、国などについてのクイズを出題した。子どもたちに知識を増やしてもらいたいというよりも、食を通して好奇心を育む種まきができるればという思いのもと実施した。週の始めに学習支援教室で私の顔を見ると一番に、「次、なに作るん?」と問うてくる子どもたちから、毎週金曜日が来ることを楽しみにしている様子がうかがえた。子ども食堂を通して子どもたちが積極的に物事に取り組み、また年齢に配慮して役割分担を行うなど、大人が見守る中で、空間を作っている一員として主体的に参加する場となったことは成果であると言える。今後さらに高い水準のシチズンシップを育んでいくために、調理の面からも子どもに任せる範囲を広げたり、献立の自由度を高くしていくなど、子どもの意思決定を促す仕掛けを作っていくたい。

10ヶ月間外国にルーツを持つ子ども・青少年エンパワメントに関わる上で、度々「当事者」という言葉の意味について考えた。これは、すたんどばいみーに出会い、彼らの外国にルーツを持つ者としての「当事者」意識に触れたからである。私は彼らから、外国にルーツを持つ者のアイデンティティを探り、当事者自らの力で自尊感情を育て社会に参画する道を模索するとはいかなるものかを学んだ。活動するにあたって私は彼らにとって、「共に事業を進めるジュニアコーディネーター」であり「外国にルーツを持つ子どもと関わる大人」であり、「日本の文化を土台にし、日本社会に住む日本人」でもある。どの「私」の視点から対話し関わるのかということは、1年を通して私が模索し続けたことだった。当事者が自分の手で権利を回復しなくては本当の意味で社会参加にならない。一方で日本人が彼らの存在を知らなければ、意識して耳を傾けなければ、彼らの声をかき消すことはたやすい。KFCと同じように何十年も活動を続けているいくつかの団体の研修を受けたときに、どの実践者も口にしたのは、「大変でも同じ場所に立ち続けることが大切だ。そうしているうちに見えてくるものが必ずある。」という言葉だった。そこにはいつも順風満帆なわけではなかったが、常に「誰のためにやっているのか」という原点を忘れず、少しでも多くの子どものもとに本質的な支援が届くように試行錯誤を重ねながら活動を続ける芯の強さが見えた。今回の事業が、数年後に振り返った時にここから始まったと言えるように、今後も外国にルーツを持つ子ども・青少年のエンパワメントに携わりながら考え続けたい。

カメラを通して見た神奈川と兵庫の学習支援教室の姿

松原 ルマ（社会人：日系ブラジル）

私は本事業で神奈川のすたんどうばいみー（以下：ばいみー）、兵庫の神戸定住外国人支援センター（以下：KFC）の活動を映像におさめるため、カメラ越しにそれぞれの学習支援教室の姿をとらえてきた。ここでは、この二つの団体が運営する学習支援教室での生徒、学習に携わるスタッフの姿やそれぞれの教室への取り組みを比較・考察したものを書き記している。

1. すたんどうばいみーの学習支援教室～子どもたちのモデルとなる～

私が初めてばいみーの活動を目にすることとなったのは、毎週土曜日に開講されている母語教室（ベトナム語）と学習支援教室を撮影のために訪れたときであった。教室に入ってきた子どもたちは元気な「おはよう」の挨拶と共に席に着く。中にはばいみーのスタッフに駆け寄ってハグをする生徒もいた。そんな幼い子どもたちに自分の弟、妹のように接するスタッフたちの表情もまた明るく教室全体がアットホームな場であるという印象を受けた。午前中の授業は就学前教室の横で母語教室が行われており、この授業の先生を務めるのが中学3年生のYであった。慣れた様子で堂々と子どもたちにベトナム語のアルファベットを教えていた彼女の姿を見て、後にインタビューするまで私と同年代かと思うほどであった。母語教室を終えてYがスタッフの宮脇英理（以下：宮脇）と授業の振り返りをしている姿を覗いてみると、先ほどの授業中の活きのある姿とは打って変わって真剣な表情で宮脇から授業中の指導に関するアドバイスを受けている。生徒それぞれの個性や母語の能力を踏まえた指導法を宮脇から引き継いでいる様子が見て取れた。

午後からの学習支援教室では、低学年と高学年にクラスの時間帯を分けて開講されており、午前からいたスタッフが続けて学習に携わっていた。休憩時間ではスタッフと子どもたちがおしゃべりをしたり、ゲームで遊んだりしながら過ごしており、その光景は先生と生徒ではなく友達同士のようでもあった。この日の全4つの教室を終えたスタッフは、その後ミーティングのために机を囲んで生徒ひとり一人の学習内容や態度などを報告しあう。加えて各生徒の家庭内の問題や些細な点もこのミーティングで共有しているようだった。授業での和気あいあいとした雰囲気から一変し、スタッフ同士の真剣な表情や、時にはその場の年長者である宮脇からの厳しい言葉やアドバイスをメモに取る姿はとても印象的であった。子どもたちひとり一人と向き合い、スタッフ全員が熱意を持ってこの教室運営に取り組んでいることが伝わってきた場面である。

それからしばらくして神奈川県内の学校が冬休みに入った頃、中学生対象の勉強合宿にも撮影で同行した。この合宿では食事、就寝時間を除いたすべてが勉強時間という日程で、受験を控えた中学3年生には対策問題や面接練習なども行われ、生徒たちにとって充実した合宿だったようだ。（しかし）中には、授業中に集中できず持ってきたカードゲームで遊んでしまう子もいたが、ばいみーのスタッフは決して叱ったりはしない。その子がもう一度席について鉛筆を持つまで諦めず諭すように彼らと向き合っていた。そのような状況においてもなぜ彼らを突き放したり、厳しく叱ったり

しないのかと疑問を投げかけると、スタッフのひとりがこう言っていた。「学校やときには家の中でも問題を抱える彼らと歩幅を合わせて勉強に向かっていかなければいけない。そのような子にこそばいみーを居場所と思ってもらえるように」

ばいみーのスタッフの多くは自身も外国にルーツを持つ当事者であり、教室に通う生徒たちと同じ道のりを歩んできた、言わば子どもたちにとっては人生の先輩であり先駆者、先導者である。子どもたちの内情に深く、そして細部まで触れることができうる立場であることは言うまでもない。自身の経験を糧にして生徒それぞれと向き合うという姿勢が代々ばいみーという団体の中でしっかりと受け継がれてきた。その所以は、スタッフ同士こそがいつも真剣に向き合ってきたからであろう。教室後のミーティングや合宿中にも深夜にかけて話し合う姿でそれが見て取れた。その姿はしっかりと現在生徒である子どもたちの目にも映り、次世代の若きスタッフの育成にも繋がっている。

2. KFCの学習支援教室～“マジョリティ側”の育成とその可能性～

兵庫のKFCが運営する学習支援教室では、夕方から開始される教室に合わせて学校帰りの小学生が次々とやってきた。授業内の勉強に対して自主的に学習に取り組む生徒もさることながら、ここでは学習に携わるスタッフに着目して興味深かった点を挙げたいと思う。スタッフの多くは大学生・大学院生のインターンであり、また日本人の学生が意欲的に生徒たちへの指導にあたっている。中には外国にルーツを持ち、かつてこのKFCの教室で学習をしていた生徒が大学生となりスタッフとして携わっている者もいる。彼らは自身の母語を流暢に話すことができるため、教室に通う来日年数の浅い生徒にそれぞれの母語で教科学習を指導している。私自身もこれまでさまざまな学習支援教室を見てきたが、これほどまでに教室内に日本語以外の言語が飛び交っている光景を目にしたのは初めてであった。来日年数の浅い生徒はそれまでの母国での教科学習を突然日本の学校で、日本語で学習をしなければならない葛藤に悩まされる中、日本語習得を優先させられ教科学習に遅れを取ってしまうことがある。またはコミュニケーションにおける日本語は習得するも、教科学習における日本語理解が不十分であることでそれが成績に影響するケースも少なくはない。そのような生徒たちに日本語と母語の両方で教科学習を指導することはより深い理解を促す学習形態であることを再認識した。それをこのKFCの教室では、外国にルーツを持つインターンによって可能にしているのである。

一方で、日本人のインターンも決して単発的な関わりではなく、中長期的に子どもたちの学習理解向上のために尽力している。中にはここで初めて外国にルーツを持つ子どもたちと接した学生もいるかもしれない。しかしながら彼ら学生は、この教室に意欲的に携わり続けるのであろうか。そのヒントとなるのが、この教室での支援者を育成していくための基盤がしっかりと構築されているからではないかと考える。まず支援者として教室に携わるにあたって、いくつかの注意事項や子どもたちと接する上での留意点が設けられている。その中には生徒の名前を本名で呼ぶことや子どもたちに挨拶、授業後の机の清掃をさせるなどといった些細な事柄である。しかし、そのような小さなことも子どもたちにとっては日本社会で生きていく上でのアイデンティティの確立や社会性の育成という意味が込められている。このようなある意味初歩的な事柄の指導を日本人のインターンなど

に意識づけることにより、外国にルーツを持つ子どもたちが日本社会で置かれる現状への問題意識に繋がるのではないだろうか。つまり、なぜ彼らを本名で呼ぶことが重要なのか、なぜ公教育ではないこの教室で挨拶や礼儀、文化的習慣を指導する必要があるのかなどについて気づくことで子どもたちのバッググラウンドに触れ、日本社会と異なる環境で育つ子どもたちの内情を理解するきっかけとなりうるからだ。日本人のインターンはこの教室で外国にルーツを持つ子どもたちの学習面・家庭内の現状に触れ、改めてエスニシティを抱えるが故に起こりうる問題に目を向け、それを踏まえた上で試行錯誤をしている。またこの教室運営をインターンの内の何人かがコーディネーターとして先導し、他のスタッフを統括することで、子どもたちを支援するその他のさまざまな活動などに理解・関心を生む機能も果たしていると考える。さらに教室では生徒ごとに作られたファイルがあり、その日生徒が学習した内容やおしゃべりから知る生徒の悩みなどにいたるまで詳細に記載されている。平日の夜間に開講されている教室のため、その日によってスタッフが流動的に変わるといった点はあるものの、そのファイルを通して子どもたちの学習状況などを共有し、生徒にとって最適な学習内容をスタッフ同士が共に模索しながら取り組んでいる様子がうかがえた。そして、日本、外国にルーツを持つ両インターンやその他のスタッフが互いを補いながら共に教室運営を成している。これらを通して文献や間接的な学びではなく、自身の目で見て感じ、考える直接的な学びを得ることができる。それこそがインターンが意欲的にスタッフとして携わり続ける所以ではないだろうか。

3. 両団体の活動を比較して～彼らが成す役割と意義～

上記のばいみーとKFCが取り組む学習支援教室を比較してみると、両者の教室運営の方法に大きな差異はないが、強いて言うなれば、それぞれのスタッフが成す役割、または意味合いに若干の違いがあると推察した。両者は共に教室・スタッフ自身が子どもたちにとって日頃の葛藤を中和してくれる居場所であり、勉強を学ぶ・教えてくれる場所という意味合いだけではない。ばいみーでは、スタッフと子どもたちが同じ地域で育った・似た境遇であるからこそ、ロールモデルとなり、外国にルーツを持った人間として日本社会で生きていく上での道しるべを提示してもらえる場所といった付加価値があると考える。そしてKFCの場合は教室を通して、携わる側の人材育成、スタッフにとっての学びや新たな発見の場という意味合いが加えられる。日本人のインターンが多くスタッフとして携わっていることから、子どもたちを取り巻く教育環境を当事者やこれに関わる活動家だけの問題に収斂させることなく、潜在的に多くの学びを得る可能性を持った学生たちが積極的に関わり、育っていくことでより子どもたちの教育をマジョリティとマイノリティが互いに共通課題として捉える土台作りを担っているのではないだろうか。

つぎに両者の共通点として挙げられるのは、教室に来ている子どもたちのエスニシティやバッググラウンドが多種多様であるということである。日頃学校生活では“日本人”と“外国人”という構図でひとくくりに区別をされることが多いが、学習支援教室に来れば生徒が皆外国にルーツがあるという仲間意識の中に、ルーツの国や言語、来日年数や経緯の違いなどがあることで、互いの違いを知り、自然とその違いを受け入れられる器を養うことが期待される。またそれはスタッフ側におい

ても同様である。この多様性への理解は子どもたちが成長する過程の中で、意見や価値観の異なる他者を知り、理解しようとする力に繋がりうる。

4. さいごに～わたしの糧、活力になったもの～

最後に、今回私は二つの教室を撮影し、両者から多くの発見と再認識させられたことがあった。カメラを回す過程の中で単に教室の光景を映像として収めるだけでなく、生徒・スタッフの表情をレンズ越しに見つめ、それを振り返ってみる中で、特にスタッフ側の人々に思いを馳せながら本文を書き進めた。というのも、私自身も外国にルーツを持つ当事者のひとりであり、現在も3つの団体（KFC含む）で母語教育と学習支援活動に携わっている。その中で自身の課題となっていたのは大きく分けて2つあり、ひとつは、子どもたちにどのようにして自発的に学習意欲を持ってもらうか、もう一点はより多くの若い世代（外国にルーツを持つ人、日本人とともに）にいかにして興味を持ってもらおうか、関わってもらうかである。今回の撮影に際して両団体からその課題解決になりうるヒントを多く学ぶことができた。外国にルーツを持つ子どもたちを取り巻く環境は私が来日してから早20年近く経つが、いまだ多くの問題が散在している。これらの問題を解決していくためには、行政や自治体、日本社会全体に打ち出す政策を思案することも重要であるが、何より学習支援教室のような草の根の活動を培っていき、より多くの人々に認識してもらうことが重要である。その一端を担うであろう本誌に今回の活動報告を書き記すことができ、私自身の大きな糧となったことにこの場を借りて感謝の意を伝えたい。

日々外国にルーツを持つ子どもたちと関わる中で、学習の重要性や指導法などにばかり注視してしまいがちだが、本来子どもたちに伝えたいことは「自分の歩みたい道を何にも邪魔されることなく大きな希望を持って生きてほしい」ということである。この本質を忘れることなく、今回の事業内で得た多くの学びを糧として私の今後の活力にしていきたい。

KFCでの学習支援活動においての学びと成長

服部 奈都子（大学生：日本）

KFCでの活動を通して、私は自分自身の性格や価値観の変化を実感している。もともと私は、対人関係が苦手でそれに対してストレスさえ感じるような性格であった。さらに、学習支援に参加する以前まで、私には外国にルーツを持つ子どもたちと関わりを持つ機会はほとんど無かった。そのため、初めてKFCに来た時は、どのように彼らと接するべきかと考え悩み、極度に緊張していたことを今でも鮮明に思い出すことができる。そして、そんな私に子どもたちは笑顔で歩み寄り、彼らから質問攻めにされたことも覚えている。あれほどほっとして自然と笑顔になった瞬間は思い返しても少ないだろう。

彼らはいつも、見慣れない顔の人が教室に来るとすぐに興味を持って話しかける。それは、私が彼らを尊敬する一つの理由でもある。私は、中学・高校とある意味彼らとは全く違った環境で育つために、見知らぬ人に出会うと不信感を持ち不安に感じることが多かった。しかし、彼らは日本人だから、女性だからなどその人を決めつけるのではなく、誰に対しても偏見をもたず、相手を知ろうと努力する。環境の違いもあるかもしれないが、私は彼らがその人自身の個性を認め向き合う力に長けていると感じ彼らを尊敬した。そして、分け隔てなく人と接する気持ちは生きていく上できっと彼ら自身に良い結果を生むに違いないと確信した。日本人でも、良く話す人がいれば大人しい人もいる。背の高い人がいれば低い人もいる。学習支援に関わり、彼らと出会ったことで、一人ひとりの違いを認めて向き合っていくことの大切さを彼らから教わることができた。

学習支援に参加して約半年が経った頃、小学1年生の女の子と出会った。最初は日本語もほとんど分からず、彼女との意思疎通がとても難しかった。さらに彼女は私と同じ人見知りだったため、一緒に勉強を始めた頃はほとんど目も合わなかつた。初めはひらがなやカタカナの練習、文字の読み方などを勉強していたが、並行して学校での勉強が進んでいくために、時間いっぱい学校の宿題をこなすようになった。

彼女と関わりを持ったことで、人と正面から向き合うことの大変さと大切さを学んだ。まず私は、彼女があいさつなどの日本語を少しずつ話せるようになった時に、学習している時にわたしが使う言葉から言葉を学んでいることに気がついた。その時から、彼女に対してできるだけ丁寧な言葉を使う努力をした。漢字の書き順が違う時はどれだけ時間がかかるても、同じ書き方ができるまで私も一緒に紙に書いて練習をした。足し算をする時は、彼女が指を使って計算するのをためらっていたので、私も指を使って計算をした。そうして彼女と向き合っていくうちに、少しずつではあったが私に心を開いてくれていることを実感することができた。

日本語を少しずつ理解できるようになることで、彼女も自分の言いたいことが伝えられるようになった。好きなアニメや動物などいろんな話をすることが多くなり、彼女の成長を実感して私はとても嬉しくなった。しかし、それと同時に当然のごとく反抗してくることも多くなった。勉強に対しても他の生徒と同じように、面倒くさいややりたくないなどの感情を伝えられるようになった。

私は、今までいろんな場面で人と向き合うことを避けてきたため、その時もこれから彼女とどう向き合っていくのかにとても悩み、逃げ出したい気持ちにもなっていた。実際に目に見える形で成果が実感できるわけではないため、自分のしていることが正しいのかさえ分からなかった。そんな不安を払拭するように、彼女は毎週笑顔でKFCにやってきて、学校であった出来事などを教えてくれた。たまに言いあいになることもあったが、そんなことは忘れたように彼女はまたKFCを訪れた。そうやって毎週一緒に過ごしているうちに、私がしてきたことは間違っていないと思なおすことができ、本気で怒ったり精いっぱい褒めたりと彼女と正面から向き合って接することができている。

私は支援者という立場でありながら、彼女から教えてもらったことはたくさんあり、本当に多くの喜びや感動を実感することができた。なにより彼女の笑顔からは、多くのエネルギーをもらうことができる。学年が上がるにつれて勉強も難しくなり、支援の内容に関しても今までと同じではなく変化が必要である。日常会話に支障がなくとも、学習していく上で障害となる部分にぶつかる時が来るだろう。私が彼女と一緒に勉強できる残りわずかな時間、今できることは何かをしっかりと考えて、彼女にできる限り伝えたい。そして、少しでも多く私がもらったエネルギーを返せるよう向き合っていきたいと思っている。

学習支援全体を通して、人生にまたとない経験をすることができたと感じている。私は去年の夏に韓国に行くまで日本を出たことがなかつたし、世界を知ることもなかつた。でも、KFCで学習支援をしていく中でできた繋がりから、本当にたくさんの個性に出会うことができ、色々な事を教わることができた。また、自分自身を取り巻く恵まれた環境にも気づくことができた。私が今、高校に進学し、大学に進学して、一般企業に就職しようとしていることは実は決して普通にできることではなく、家族や周りの人、環境に恵まれたことで実現することである。KFCで学んだ出会いの与える力を、今度は私と出会った人に与え、会えてよかったですと思ってもらえるような人間に変われるように努力したい。そして、周りの人に感謝する気持ちを持ち続けることが大切である。普段の小さな出来事からも、私にできることは何かを考え、人のために役に立てるようこの経験を活かしていきたいと思う。

インターンを経験して

鈴木 裕子（大学生：日本）

この一年間、インターンとして神戸定住外国人支援センター（以下KFC）の子ども学習支援コーディネーターの活動をしたことは、本当に私にとって貴重な体験となった。

様々な国籍、様々な言語、様々な性格を持つ子どもたちと関わってきて一番大切なことは、「同情しないこと」だと私は思う。「日本語をうまく話せないことがかわいそう、学習をすることがつらそう」そんなことは当たり前の話であって、そこに同情していたら子どもたちは前へは進めない。KFCにいる子どもたちは自分の意見も、私に対する指摘もしつかり話すことができる。それができるのは、今まで子どもたちと関わってきた支援者の方や、私のように学習支援コーディネーターをしてきた先輩方、そして私たちとの間に信頼関係が強く結びついているからだと思う。子どものためを思うことは、ただ優しく、同情することではない。子どもたちが学校や家、またKFCで感じた喜びを共有し合ったり、問題があれば真剣に向き合い、一緒に解決したりすれば自然に子どもたちの心の中に「自分の居場所がちゃんとあるんだ」という気持ち生まれる。たとえ叱ったとしてもそこに「愛」や「あなたのためを思っている」という気持ちをぶつけることができれば、子どもたちの心に絶対届くということが、下記の二つの体験から感じることができた。

一つ目は、現在中学三年生の反抗期の男の子との出会いだった。初めてその男の子の支援についていた時、正直学力は中学一年生程度、そのうえ反抗期で言うことはまず聞かなかった。でも、その男の子と毎週関わる中で、この子は自己表現が苦手なだけで根は頑張り屋さんということが分かり一緒に頑張ることを決めた。何度も「嫌い、もうええわ」とも言われたが、しつこいほどコミュニケーションをとり、時には叱り、問題を解くことができれば褒めたりもした。私の思いが届いたのか、自分から「この前のテストいい点とれた」と言っててくれるなど、いつしか少しずつ他の中学生の子どもたちとも距離を縮められたりした気がする。何より毎週休まずに学習支援に来たことを一番に褒めた。彼との出会いのおかげで、私は心から子どもたちと向き合おうと思うことができたし、たった少しの時間だったが、彼との間に信頼関係ができたことがとても嬉しかった。残りの時間を大切にしていきたい。

二つ目は、日本語を話すことができない子どもとの学習での出来事である。まず日本語が分からないので問題すら読むことができない。もちろん、内容など理解できるはずがない。お互い共通の言語がない中でジェスチャーやその子の母語が話せる子どもに時々仲介役になつてもらいコミュニケーションをとる形で学習を進めた。一問を解くのに30分もかかってしまったが、その子は一度もあきらめずに私が言おうとしていることを必死で理解してくれようとした。一生懸命伝えればそれが相手にも伝わる嬉しさは裏腹に、その子の母語を話すことができたらもっと理解し合えたのにというもどかしさや、世間に対してもつとKFCにいるような外国にルーツを持つ子どもたちがこれだけ日本で一生懸命頑張っている、人一倍努力していることを知ってほしい、同情ではなく心からその子どもと向き合ってほしいと思った。

私自身、留学という経験を通じて少なからずKFCにいる子どもたちの気持ちを理解することができた。自分の母語ではない世界で、自分の意見はあるのにその半分も言葉に出して言えないくやしさ、自分と違う顔・言語・衣食住の中に溶け込んでいく勇気、学校生活で先生の言っていることが分からない、など

マイナス面から言ってしまえば、外国にルーツを持つ子どもたちが一度は体験したことを直に体験した。でも、その中で「一生懸命伝えよう！自分の思ったことは言葉で伝えよう！あなたと友達になりたい！」など自分の気持ちを相手にぶつければ相手は助けてくれるし、自分のことのように考えてくれた。その小さな勇気をKFCの子どもたちに持ってほしいし、それ以上にその勇気や気持ちを理解する人が必要だと思う。

学習支援を通して、支援をするまでの自分の外国にルーツを持つ人に対する考え方の浅はかさをとても反省した。たかが一年、されど一年で私の中の世界観がひっくりかえった時間であった。だからこの経験を経験で終わらせるのではなく、自分のまわりの人々に伝え、継承していく必要があると思う。私と同じ大学生がもっと知ってほしい。これからNPO法人やKFCの在り方、学校とのかかわり方、外国人児童に対する高校進学制度など様々な課題があるかもしれないが、私はまずもっと多くの人が、このような子どもたちがいることを知ること、きちんと向きあうことが課題であると思う。決して難しいことではない。

毎週木曜日学習支援にいくと、「先生」ではなく「鈴木先生」と呼んでくれることが本当に嬉しい。「先生、私もっと頑張るわ」「今日の学校楽しかった」その一言ひとことが本当に嬉しいし、その言葉を大事にしていかなければならないと思う。こんな素敵なかんじな経験をさせてくれたKFCの方々、支援者・学習支援コーディネーターの方々、そして子どもたちにお礼を言いたい。これからも、このような機会があれば積極的に参加して子どもたちの未来を考えていきたい。

1年間活動に関わって気づいたこと —「平等」な教育機会の保障について—

大東 直樹（大学院生：日本）

本レポートでは、筆者がこの1年間KFCの活動に関わることで、外国人生徒に対する教育機会の保障について気づいたことを述べたい。具体的には、筆者は主に中学生の学習支援に関わっていることから、彼・彼女らに待ち受ける高校入試に注目し、外国人生徒への「平等」な教育機会の保障の意味に関する自身の認識の変化について報告したい。

「気づいた」ことなので、まずはそれ以前にはどのような考えを持っていたかを説明したい。現在、筆者は博士課程の大学院生である。話は筆者の修士論文まで遡ってしまうが、筆者は修士課程の時から教育の不平等に一貫して関心を寄せてきた。筆者は修士論文において、ある発展途上国における前期中等教育の就学率格差に問題意識を持ち、その要因分析をおこなった。その国では、前期中等教育の就学率が依然として低い状況にあった。一般に、そうした国において教育の平等とは就学率が100%になり、全国一律に前期中等教育が行き渡ることを意味する。筆者は、居住地域によって受けられる教育の量・質に不平等が生じることに問題意識を持ち、全国一律に、皆が同じ教育を享受できることが「平等」な教育機会であると考えていた。

こうした問題意識のもとで修士論文を執筆したわけだが、その後、教育の不平等の問題を考える際に、日本に在住する外国人生徒の高校進学にはさらに複雑な問題を抱えていることに気が付いた。それは、日本の公教育が従来想定してこなかった外国人生徒に対して、いかに「平等」な教育機会を保障していくのかという問題である。しばしば指摘されるが、移民や外国人の子どもの教育に先進的な対応を展開する欧米に比べて、日本の教育制度は遙かに後進的・排他的である。しかし現実には、国も地方自治体の多くも多文化共生を理念として掲げている。だとすると、多文化共生の理念のもと「平等」な教育機会の保障とはどうあるべきなのか。以下では、筆者の経験を踏まえた上でそのことについて再考した。

筆者はKFCでの学習支援において、渡日間もない中学生に基礎的な日本語から教える経験をさせて頂いた。彼・彼女らはほとんど日本語を話せない状況で日本の学校へ放り込まれる。当然、授業内容を理解することは当初はかなり難しい。月日が経ち、日本語での会話がスムーズに出来るようになっても、学習思考言語との違いもある。計算を用いる理数系や、渡日前に学んでいた英語などはむしろ他の日本人生徒よりも得意な場合もあるが、現代文、古典、社会など日本語や日本文化に強く依存する教科は苦手なことが多い。またあまり注目されないが、家庭科や保健も困難に感じる生徒が多いことに気が付いた。家庭科はまさに日本の文化が表れるし、保健も漢字の専門用語だらけである。さらに国籍による得意・不得意が異なることも実感した。例えば、漢字圏出身と非漢字圏出身の違いは日本語での学習に大きな影響をもたらす。非漢字圏出身者は、日本語の問題文を読むだけでも一苦労である。このように日本の学校教育においては、学習達成に外国人生徒の文化的背景やこれまで受けてきた教育の違いが強く影響することを改めて実感した。

上述した通り、彼・彼女らは学習面において明らかなハンデを負いながらも、日本人生徒と同様に高校進学を希望する。日本ではアルバイトでさえ高校卒業資格が求められるため、高校進学を希望することは当然であろう。実際としても、彼・彼女らが数年後受験する日本の高校は、国籍に関わらず誰でも受験することは可能で、形式的には全ての子どもに受験の機会が「平等」に開かれている。しかし現実には、外国人生徒の高校進学率は日本人生徒と比べて概して低い。こうした状況から生まれる問題意識は、外国人生徒が日本人生徒と同じように高校入試を受けることは果たして「平等」なのか、というものである。そしてそれは、日本人生徒と外国人生徒には文化的背景の差異が明らかに存在し、それは外国人生徒の学習達成に大きな影響を及ぼしているのに、である。

一部の地方自治体は上述の問題意識から外国人生徒を「特別扱い」し、一般とは別に入学枠を設ける特別入学枠を実施しているが、その他の多くの自治体は「入試の公平性」を理由に特別入学枠を実施していない。平等の概念には、全ての者を均一に扱おうとする形式的な平等と、対象者の状況に応じて一人ひとり異なる対応をしようとする実質的な平等がある。このことを踏まえると、ここでいう「入試の公平性」とは形式的な平等で、特別入学枠のように外国人生徒を「特別扱い」することはむしろ不平等だということを意味する。このように形式的な平等の概念からすれば、特別入学枠は確かに「入試の公平性」が問題になり得る。

しかし国や地方自治体が多文化共生を理念として掲げながらも、形式的な平等を求めるることは果たして適切なのだろうか。筆者は学習支援で経験した彼・彼女の文化的差異を前に、外国人生徒も日本人生徒も同等に扱おうとする日本の高校入試は、あまりにも形式的で、むしろ不平等であるとの認識をもつようになった。つまり、機会が形式的に平等だとしても、渡日間もない外国人生徒にとっては、それはむしろ不平等ではないだろうか。国や地方自治体の多くは多文化共生を理念として掲げているのだからこそ、今、高校入試に求められているのは実質的な平等だと考える。実質的な平等のいう、一人ひとり異なる対応をすることが平等だとする平等観は、筆者が修士論文で前提としていた形式的な平等観とは異なる。発展途上国のように、学校教育が十分に行き渡っていない状況では形式的な平等がまず求められるのだろうが、日本に在住する外国人生徒にとっては、実質的な平等こそが重要だと考えるようになった。このことが、筆者が1年間活動に関わることで気付いたことである。

高校生インターになつて

陳 宗 堯 (高校生：中国)

今年、私は高校生になり、KFCでインターを始めました。毎週の木曜日の学習支援と金曜日の“みんなのダイニング”的両方に参加しています。中三のときまではKFCに生徒として大変お世話になっていた側なのですが、今では自分よりちょっとだけ小さい中学生たちに勉強を教える側になりました。これは私の初めての作文になるのですが、木曜日と金曜日の活動を書いていきたいと思います。

木曜日の学習支援では、私は夜の6時半から8時半までの中学生の部を担当しはじめて半年ぐらいを過ごしてきました。みんなそれぞれ違う学校から来て、それぞれ日本語、理科、国語などの違う教科を勉強しているので、大変でした。国籍や性格なども違うことを加えていたら、時々しんどい思いをしたこともありました。教えられる側から急に教える側になってみたら、人にものを教えることはとても大変でした。今、私が教えているのは中国から来たばかりのまだ日本語があまり話せない中学生です。年が近いせいか、あまり私の話を聞いてくれなくて、何かを教えようとしても、すぐに集中力が切れ、やる気がないときもありましたが、それでも少しづつ少しづつ彼らと一緒にたくさんの困難を乗り越えてきました。そうやって一緒に勉強していく中で、徐々に楽しくなって、不思議なことに自分も成長したなと思うようになりました。

金曜日の“みんなのダイニング”では、主に孤食の問題を解決するために子どもたちと一緒に料理を作り、食卓を囲んで食事をしたり、話をしたり、遊んだりしています。私は5時からいろんな準備をしていますが、後で来た子どもたちも手伝ってくれてとてもうれしいです。食卓でいろんな話をしているのもとても楽しく、皆と仲良くなつてとても有意義な時間を過ごせています。

私のKFCでの時間はとても有意義で、一分一秒も無駄はありません。インターになって、初めて気づいたことや知らないこともたくさんありました。これからもがんばっていきたいと思っています。

(2016年11月17日 執筆)

外国人の子ども・青少年エンパワメント事業を終えて

志岐 良子

子どもの6人に1人(約16%)が貧困と言われている。「外国人」の貧困について把握している調査はないが、お茶の水女子大学名誉教授の宮島喬の著書「外国人の子どもにみる三重の剥奪状態(特集 社会的排除と子どもの貧困)」によると、静岡県の調査データでは貧困ライン以下の外国人世帯率は35%と推計しており、日本人の家庭に比べると非常に厳しい家庭が多いということを、事業を展開している中でも実感している。経済的貧困の家庭では、文化資本が少ないとや、社会関係資本が少なくコミュニティと断絶し人とのつながりがほとんど持てていない孤立状況であるなど、貧困から抜け出す術を持ち合わせないことも少なくない。

本事業の実施主体である神戸定住外国人支援センター(以下、KFC)が立地する神戸市西部地域は地場産業が衰退し、生活保護率が高く経済的困窮者が多い地域となっている。またKFCの活動の普及を行った神奈川県の大和市と横浜市に広がっている県営いちょう団地は、集合住宅が30棟以上立ち並ぶ巨大団地であり、駅から団地へ向かうほぼ一本道ですれ違う住民たちの多くから中国語やベトナム語などの日本語以外の言語が聞こえてくる、外国人が約3割、その他の日本人住民はほとんど高齢者という状況の団地である。団地住民の経済状況は厳しく、(神戸市西部地域と)同じようにそこで育つ子どもの状況も厳しいと言わざるを得ない。そこで、まずは支える側となる若いリーダーを育て、地域で育つマイノリティの子どものロールモデルを作り、子どもが自立するための日本語力、学力を育てる場所を作ることを目的として事業を実施した。

ジュニアコーディネーターには、事業の運営や、インターン研修会の企画・運営、それに付随する事務作業などを担ってもらった。その中で、事業遂行能力を少しずつ身に着けることができた。

インターンには、研修や子ども事業への参加をしてもらい、マイノリティ(外国人)の歴史や進学、地域の状況、人権についてなどの知識を深めてもらった。

研修会では、先のジュニアコーディネーターからの報告にもある通り、有識者や現場で長くマイノリティを支え続けている方たちから多くの学びを頂いた。

ネットワークづくりでは、大和市国際化協会、かながわ国際交流財団、難民支援協会などと情報交換させていただき、今後の繋がりを作ることができた。

子どもの学習支援では、神戸には、中国、ベトナム、フィリピン、ペルー、アフガニスタン、パキスタン、神奈川の方には、ベトナム、カンボジア、ペルー、中国、インドネシアなどの子どもが学習にきた。1年という限られた時間の中では、著しく学習成果が現れる子どもはさほど多くなかったが、継続して学習に来る中で学習意欲が上がり高校や大学などの進学への興味も持てるようになっている。学習支援の中で、先輩の高校生から話を聞く場を設けたり、学校教員の協力による進路相談会の場を設けることで、情報不足を補うことができ、学習意欲を高めることにも繋がった。また中国人、ベトナム人留学生なども多く事業に参加し、留学生を活用した新しい支援の形を提案することもできた。そして、不登校気味の中学生と学校のパイプ役として、学校生活が送れるよう

細やかなサポートを実施することができたことや、本人の言葉の問題もあり希望する進路を学校に伝えきれない子どものために学校へ同行し希望高校への受験ができることになったことは、子どものやる気を育てる意味でも大きな成果となった。

読書活動は、学校での出張読書の会では多くの子どもに参加していただくことができた。また地域のイベントでの読み聞かせにも40組もの親子が参加してくれた。週1回の神戸市立新長田図書館での読み聞かせも、英語学習とのセットで、5~6名が毎回参加し、その都度図書館の本を借りて帰るなど本に親しむ機会が増えた。

子ども食堂は、孤立させない、人とつながる、学びの場となる=えん（縁、円）を持つことをコンセプトに実施した。母子家庭や保護者が飲食店などで夜遅くまで働いている子どもなどが参加し、参加した子どもからは、「みんなで食べると美味しい。毎日、開いてほしい」という声や「家庭では得られない日本の食などの文化を知ることができることはすごくありがたい」という声などを聞くことができ、準備なども非常に積極的に参加する様子を見ることができた。また、ほぼ毎回食に関連するクイズを出し、食育にも努めた。

インターンで参加した学生のうち1名は、語学習得を目的に留学を検討していたが、活動に関わるうちに、海外での移民の受入状況を学びたい、そして日本で活かせることがあれば活かしたいというように、活動に参加したことで留学の目的が変化した。そのほかのインターンについても、それぞれの報告を読んでいただくとわかるとおり、子どもに向かい、日々子どもに必要なことを考え、信頼関係を築こうと葛藤しながら活動に参加していた。外国人当事者として関わるものの中でも、これまでのそれぞれの経験の違いが子どもへの接し方や子どもにとって必要なものがなにかを考えるときの違いとなっているが、考え方、学ぶことが多かった。日本人インターンにとってはこれまで経験したことのないことや、日本語がまだ十分に習得できていない子どもが学習に困難を抱える状況を目の当たりにし支援する中で、日本の教育に対する疑問やそれぞれの子どもの抱えさせられている困難を知る大切な機会を得ることになった。そして、外国人の子どもには情報が圧倒的に不足しているという気づきや、居場所の必要性、外国人の子どもへの向き合い方など考える契機となった。また日本の子どもに必要なこととして、無知や無理解、差異に対する不安な感情から脱するための、制度としての異文化体験が必要であるという気づきも出てきた。

今回助成頂いた「地域で日本語の壁や貧困、低学力など様々な困難を抱える在日外国の子ども・青少年が『自立できる仕組みができる』ことを目的に、『在日外国人の子どもと青少年に必要な社会事業を当事者が地域とともに生きる人たちと協働して進めエンパワメント』する事業」は、地域と共に生きる青年たち（日本人と外国人）が協働するという点では大きな意味があり、多くの幼児から中学生までのサポートも実施できた。自立して運営できる仕組みを作るにはもう少し時間がかかりそうだが、そのための種を植えることはできたのではないかと思う。芽を出し、運営が滞りなく進むためにはまだ訓練が必要だが、今後も同じ地域に生きる青年同士で、また神戸と神奈川で、協働し知恵を出し合いたい。

最後に、本事業の趣旨をご理解いただき、未来を支える若い人材の育成のためにご協力いただいたみなさまに感謝したい。

活動参加人数（神戸）

子ども支援事業	学習支援教室(小学生)												
	開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	スタッフ・ボランティア数	104	119	168	155	101	134	122	132	111	128		1274
	参加者数	159	167	230	201	142	191	181	188	153	172		1784
	学習支援教室(中学生)												
	開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	スタッフ・ボランティア数	44	49	85	67	60	67	73	72	67	55		639
	参加者数	79	68	125	94	95	110	100	97	104	81		953
	読書活動												
	開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	スタッフ・ボランティア数	15	17	13	20	8	18	17	19	0	7		134
	参加者数	34	32	28	41	10	38	24	111	0	9		327
	子ども食堂												
	開催月			6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	スタッフ・ボランティア数			13	32	30	31	32	23	29	23		213
	参加者数			10	59	35	46	46	39	40	21		296
神戸相談	開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	件数	7	5	4	7	7	5	16	8	11	1	1	71

子どもも支援合計人数（1月末現在）	3360人
-------------------	-------

※ 2月・3月は本書発行時未集計のため空欄

活動参加人数（神奈川）

		就学前教室													
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	
スタッフ・ボランティア数	6	7	5	6	6	11	5	12	4	7				69	
参加者数	6	5	8	10	4	4	5	5	5	4				56	
子ども支援事業															
		小学生教室													
開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
スタッフ・ボランティア数	24	16	24	8	10	17	8	19	28	13				167	
参加者数	57	42	48	28	42	40	26	59	69	42				453	
		中学生教室													
開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
スタッフ・ボランティア数	27	17	14	15	9	15	6	7	13	7				130	
参加者数	31	17	15	18	6	17	7	14	13	13				151	
大人支援事業															
		母国語教室													
開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
スタッフ・ボランティア数	7	5	5	3	4	5	3	9	5	5	14			60	
参加者数	35	22	21	16	13	26	13	30	20	20	43			239	
		学校通訳													
開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
スタッフ・ボランティア数	4	4	5	3	0	3	2	5	6	2				34	
参加者数	6	6	8	5	0	5	2	11	8	2				53	
		日本語教室													
開催月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
スタッフ・ボランティア数	14	10	8	6	10	14	16	15	16	7				116	
参加者数	28	41	25	12	16	64	43	41	15	36				321	
		神奈川相談													
件数	1	3	2	1	3	2	2	2	3	2	2	3		22	

子ども支援合計人数（1月末現在） 1273人

※ 2月・3月は本書発行時未集計のため空欄

外国人の子ども・青少年エンパワメント事業報告書

2017年3月発行

編集・発行 NPO法人 神戸定住外国人支援センター (KFC)

〒653-0038 神戸市長田区若松町4-4-10

アスタクエスタ北棟502

Phone. 078-612-2402 Fax. 078-612-3052

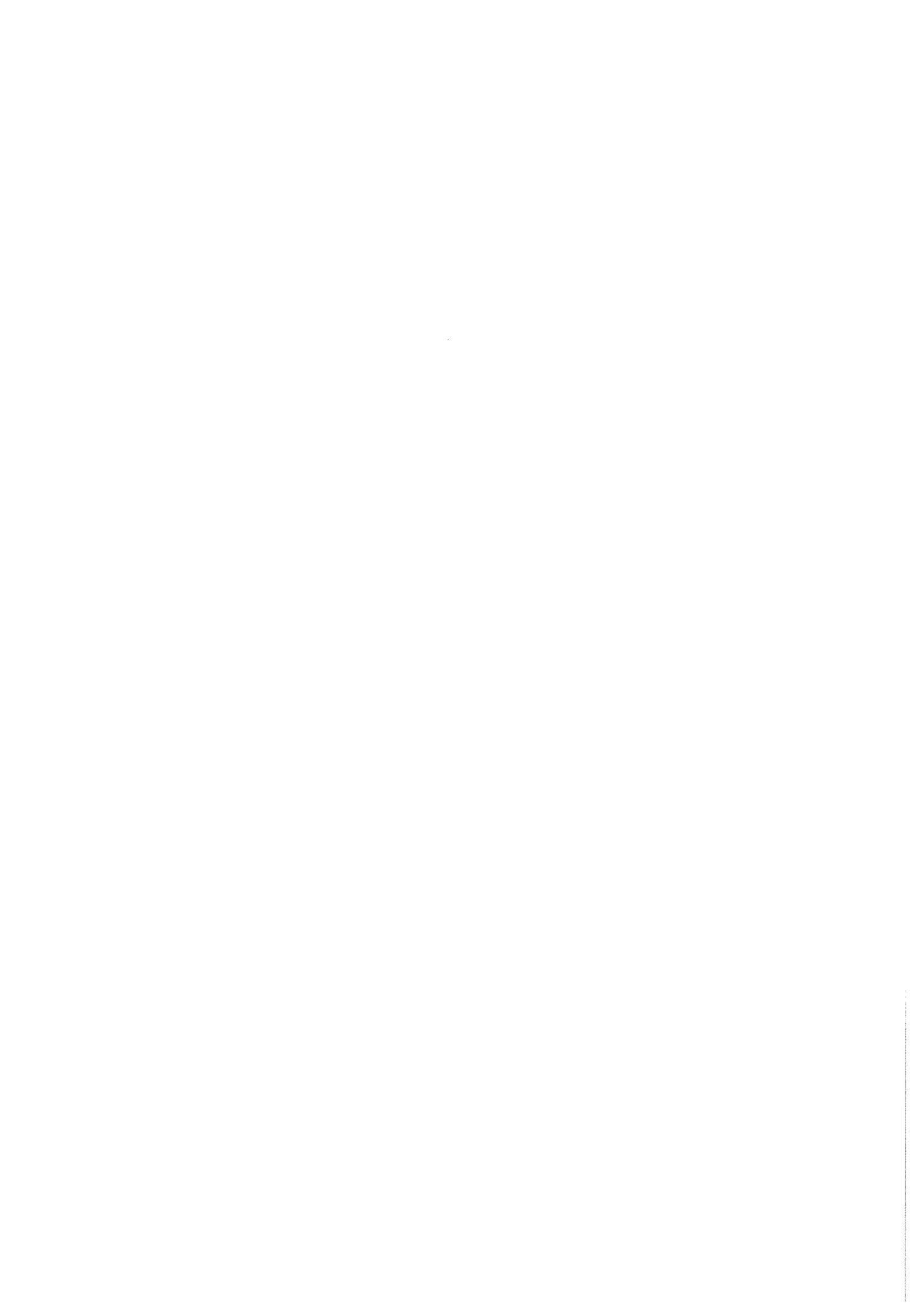
E-mail. kfc@social-b.net

協力 NPO法人 外国人支援ネットワーク すたんどばいみー

表紙デザイン グエン タン ティン

裏表紙イラスト グイ キム チャーイ

この報告書は、独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業を受けて作成しました。





独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業